棚田地域振興の取組事例 地区一覧表

村上市高根
高根フロンティアクラブ ..... 1～4
棚田地域 高根の棚田

小千谷市真人町若栃集落
(株)Mt.ファームわかとち ..... 5～8
棚田地域 若栃の棚田

十日町市松代
NPO法人 越後妻有里山協働機構 ..... 9～12
棚田地域 松代・室野・星峠棚田

津南町三箇
三箇地区都会との交流を進める会 ..... 13～16
棚田地域 鹿渡・鹿渡新田棚田

柏崎市高柳町門出
門出棚田愛農会 ..... 17～20
棚田地域 大開の棚田

上越市安塚区細野
自然王国ほその村(細野町内会) ..... 21～24
棚田地域 安塚区細野の棚田

糸魚川市根知地区
中山間地域等直接支払 根知集落協定 ..... 25～28
棚田地域 稲場・栗山・山口・山寺・上町屋・上野・大工屋敷・大神堂・東中・別所・和泉棚田

佐渡市岩首
岩首談義所 ..... 29～32
棚田地域 岩首昇竜棚田

地域における取組のキーワード

- 地域おこし協力隊
- 企業等との連携
- 教育分野との連携
- ボランティアとの連携
- スポーツ、芸術分野との連携
- 棚田オーナー制度
- 都市農村交流
- 農泊の推進
- 移住定住の促進
- 農産物のブランド化
- 農産物の加工販売
- 伝統文化の継承
- 閉校、古民家等の利活用
- ほ場整備

ARアプリ「COCOAR(ココアル)」を通して表示される3D地形は、国土地理院の空中写真、地理院タイル(年度別空中写真(2007年以降))及び基盤地図情報数値標高モデルを基に、株式会社武揚堂が作成。

村上市高根

高根フロンティアクラブ

高根の棚田

地域の概要

高根集落は、村上市北部（旧朝日村）の山間部に位置し、四方を山に囲まれた緑豊かな集落である。安土桃山時代に鳴海金山と共に栄え、山村地域でありながら現在も160世帯近くある大きな集落である。

かつて主な産業は農業と林業であったが、平成に入り集落の人々は他地域に収入を求めるようになっていった。

平成8年、高根集落の将来に不安を抱いた青年グループが自ら集落内を変えていくことを目的に「高根フロンティアクラブ」を設立。閉校した校舎を活用した食堂の経営やイベントを通して、都市との交流、企業との連携を図り地域活性化に繋げている。また、集落内の若い世代を中心に設立された「（一社）高根コミュニティラボわぁら」と協力しながら高根集落の地域づくりの創造に努めている。



高根の棚田全景


畦畔の草刈り

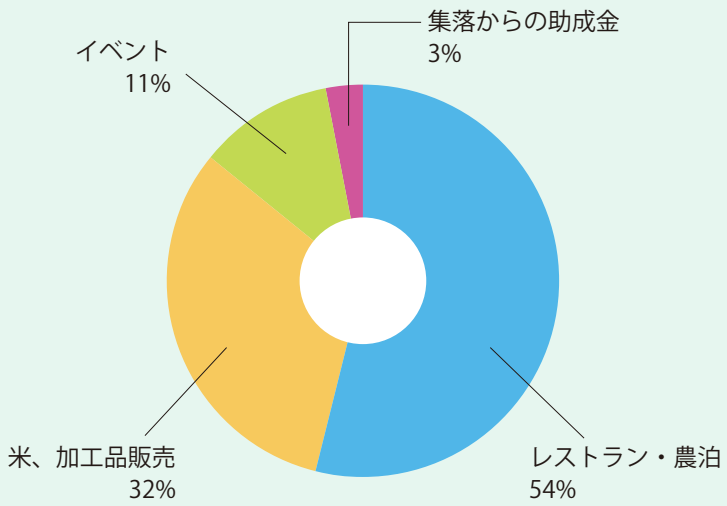

冬の高根集落

受賞歴
- 平成19年度過疎地域自立活性化優良事例 総務大臣賞受賞
- 令和２年度（第59回）農林水産祭 天皇杯受賞

基本情報

名称	高根の棚田
枚数	1650枚
耕作面積	約113ha
耕作率	83%
標高範囲	70～380m
平均勾配	1/8
法面の構造	土羽（土坡）
水源	湧水、沢水
保全団体	高根保全組合

活動資金



地域における取組のキーワード

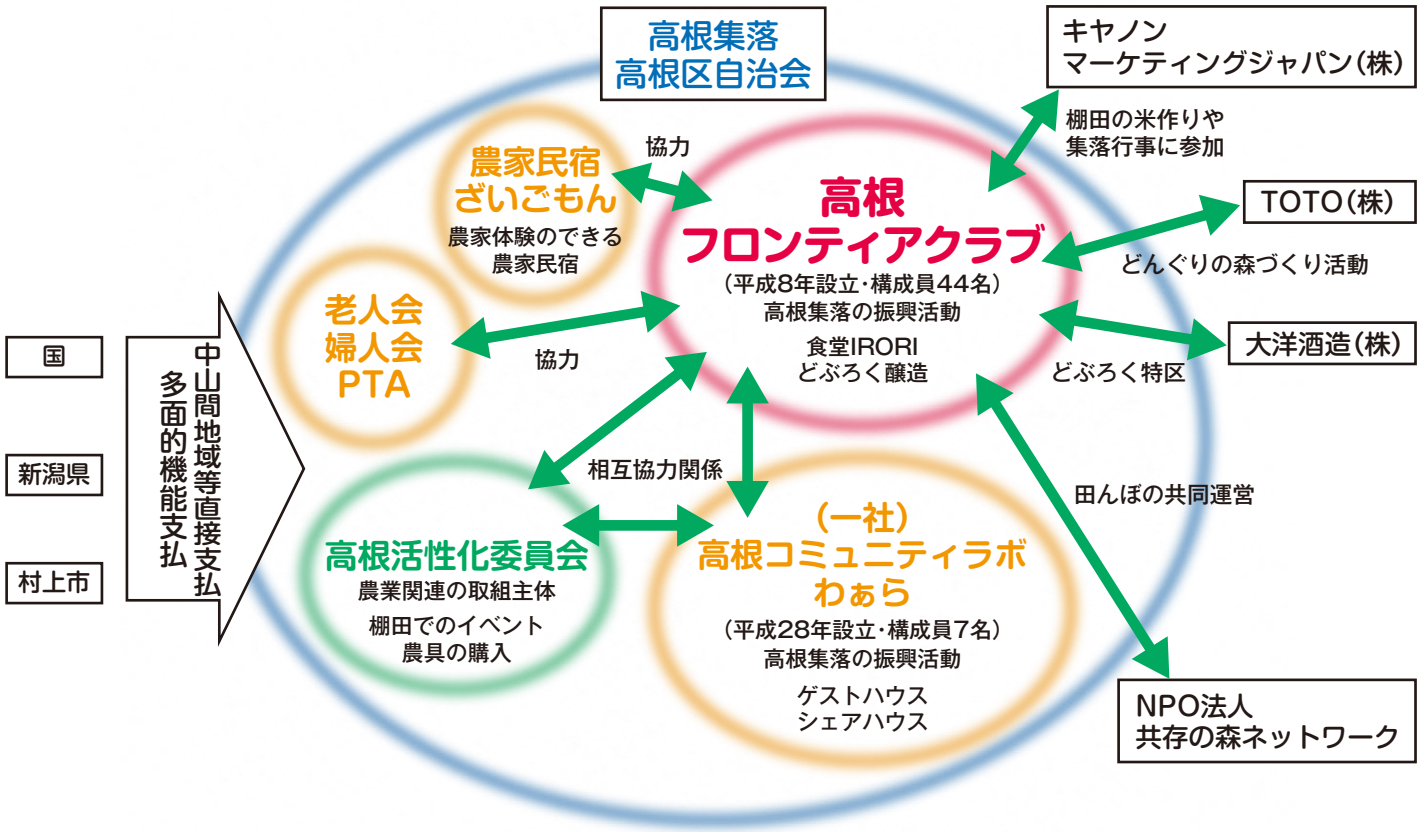
- 企業等との連携
- 教育分野との連携
- 都市農村交流
- 農泊の推進
- 農産物の加工販売
- 閉校、古民家等の利活用
- ほ場整備

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 881 117 466*00

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

鈴木 信之(すずき のぶゆき)さん

食堂、どぶろく、農家民宿、ゲストハウス、シェアハウス すべてが高根集落の経済を支える取組です。

「高根フロンティアクラブ」設立以来、常に地域活性化のために高根集落に貢献する高根フロンティアクラブ会長の鈴木さんから高根集落についてお話を伺いました。



高根フロンティアクラブ会長として集落全体を考える鈴木 信之さん

「高根フロンティアクラブ」の活動は、棚田の保全に特化した取組ではありませんが、高齢化と人口減少で活力が低下した高根集落の活性化のために、他地域との交流事業や、集落の特色を活かした事業を進めながら、棚田の保全にも取り組んできました。

現在は外から来た人、若い人たちとの関係性を大切にしています。若い組織である「わぁら」が取り組むゲストハウス、シェアハウスなどの新しい発想が、高根集落を元気にしてくれています。「高根フロンティアクラブ」と「わぁら」の取組で高根集落を盛り上げています。

Q 高根集落の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 高根集落の方向性をみんなで考える時に開くワークショップですね。老人会、婦人会などに加え、外部の人にも参加してもらっています。ワークショップを行うことで、色々な意見をみんなで考える機会を作ることができ、効果的な取組に繋がります。閉校した校舎の食堂活用も、若干の反対意見もありましたが、ワークショップを行ったことで高根集落としての意思統一を図ることができました。結果的に「食堂IRORI(しょくどう いろり)」ができたことで、高根集落の経済は変わりましたから、これからも新しい取組を始める時や、集落全体で問題意識や意見の共有のためにワークショップは必要不可欠です。


食堂IRORI

Q 高根集落の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A 高根集落として若い力を積極的に受け入れていったことです。「高根フロンティアクラブ」設立から現在まで「共存の森ネットワーク」の受け入れや「わぁら」との連携などで感じたことは、様々な活動を繋いでいくためには外からの若い力が必要不可欠ということです。新しい活動によって高根集落の人たちも考える意識を持ち、気持ちも変わっていきました。外から来た人たちが高根集落の魅力を感じている様子を見ることで、私たちは集落内を客観的に見ることもできました。こうした意識の変化で、より一層「高根の棚田」を守らなければいけないという思いも強くなっていきましたね。若い人たちの力で変化させてもらっているんですよ。

高根集落 取組のプロセス

取組以前


高根集落

「高根の棚田」は昭和50年代にほ場整備が完了しており、不整形の田んぼは無く、全て機械が入る状態になっていた。ほ場整備から外れたところは植林して農地以外に活用された。

当時は米の価格が良く、農業を生業とする人も多かったが、次第に米の価格が下がってきてからは、若者も農業の将来に不安を抱くようになり、農業への関心が薄くなっていった。

取組のきっかけとその過程

高根集落の産業の根幹である農業や林業の収入が減少し、集落内の人々は他地域に収入を求めるようになった。過疎化・高齢化が進み、離農者が増えていった。また、高根集落の田んぼは地下から水が湧いてくることもあり、畑には使いにくく、猿などの獣害もあることから、このままでは農地が維持できなくなるとの危機感が増していった。それでも、高根集落から田んぼが全て無くならなかったのは、農地を守り、維持したいという人たちがいたからであった。

この地域には、魚沼地域と並ぶブランド米である岩船産コシヒカリがあり、棚田の高冷地の米ということで美味しいと評価してリピート購入してくれるファンがいた。高根集落として、ファンのためにも農地を維持して米を作り続けていこうという思いがあった。

キーポイント 高根フロンティアクラブを設立

平成8年当時、高根集落は「山の中でも空き家のない集落」と呼ばれるくらい栄えていたが、集落の有志たちは、早めに自らの集落を変えていこうという気持ちから、地域づくりと活性化を目的とした「高根フロンティアクラブ」を設立した。

平成12年に閉校した高根小学校の校舎を改装して、平成15年に「山のおいしさ学校 食堂IRORI」をオープンした。地元食材を使った定食や特産物を販売し、観光客を受け入れて高根集落の活性化を進めた。



食堂IRORI

また、早くから積極的に首都圏の交流イベントに参加し、集落の棚田米や物産品の販売を通して「高根」の名前と価値を強く他地域にアピールしてきた。

他地域との交流事業として平成18年に開始した、首都圏の大学生による「NPO法人 共存の森ネットワーク」との交流は当初、ブナ林の植樹と地域を知ろうという目的であったが、棚田の農作業にも参加したいということで集落の農家から稲作を学び、その後は「高根フロンティアクラブ」と一緒に田んぼの運営をすることになった。


高根フロンティアクラブ

平成20年からはTOTO(株)が、どんぐりの森づくりでCSR活動を開始し、どんぐりの苗の植樹や棚田米購入で地域との交流の輪が広がっていった。また、平成22年からはキヤノンマーケティングジャパン(株)が、田植えや草刈りの取組でCSR活動を開始した。さらに、村上市のどぶろく特区認定を受け、平成17年には、大洋酒造(株)と棚田米を使ったどぶろく作りで連携した。「高根フロンティアクラブ」の設立は、高根集落と外部の繋がりを促し、地域の活性化に大きく貢献してきた。

※CSR活動:「Corporate Social Responsibility:企業の社会的責任」企業としての社会貢献の活動

現在

高根集落の地域活性化の取組は、平成8年から「高根フロンティアクラブ」が担ってきたが、「NPO法人 共存の森ネットワーク」の一員で一緒に活動していた人が集落へ移住して、平成28年に「(一社)高根コミュニティラボわぁら」が設立された。


田植え体験

20～40歳代のメンバーで構成される「わぁら」は、新たな取組として空家を改修したゲストハウスやシェアハウスを運営し、「高根フロンティアクラブ」と同様、地域活性化の取組を牽引している。また、棚田米の販売や集落内の情報発信と併せて、実際に高根集落に足を運んでもらい、農業体験・暮らし体験を通じて「高根」の魅力に触れてもらう「たかねびと」という村民制度を開始して、新たな高根集落ファンの獲得を目指している。

その他にも棚田でのイベントを企画する「高根活性化委員会」、農村体験ができる農家民宿「ざいごもん」、集落内の「老人会」、「婦人会」、「PTA」等と協力して高根集落を盛り上げている。

高根集落は、「高根フロンティアクラブ」と「わぁら」といった、歴史、世代、取組の切り口の異なる２つの組織が集落を牽引し、集落内の組織や人々と一緒に考えながら地域活性化の取組を進めている。

プロセス1 昭和50年代
「高根の棚田」でほ場整備を実施

ほ場整備により全て機械が入る田んぼになったが、米価の下落や担い手不足から将来に不安を抱き、農家の稲作への関心が薄くなっていった。

プロセス2 平成8年
「高根フロンティアクラブ」を設立

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

当時は「山の中でも空き家のない集落」と呼ばれていたこともあり、さほど危機感はなく楽観視する傾向もあったが、集落の有志たちは早めに取組を始めようという気持ちがあった。


食堂IRORI

プロセス3 平成15年
「山のおいしさ学校 食堂IRORI」をオープン

「食堂IRORI」の運営によって集落内で所得と雇用を確保する仕組みができ、集落の経済活動にも貢献を続けている。

PICKUP! 平成16年 田んぼの学校を東京で開催
生き物観察会に都内の子どもたちは夢中になった。


雪中貯蔵


どぶろくの仕込み

プロセス4 平成17年
どぶろく特区認定で「雲上（くものうえ）」の醸造を開始

棚田米を使ってのどぶろく作りで大洋酒造（株）と連携。PRの材料として雪室を使い農産物や酒を雪中貯蔵する。

プロセス5 平成18年
「NPO法人 共存の森ネットワーク」との交流を開始

交流をきっかけに「高根フロンティアクラブ」と一緒に田んぼの運営をすることになった。

平成19年：農地・水・環境保全向上対策取組開始

PICKUP! 平成19年 総務省と全国過疎地域自立促進連盟から総務大臣賞を受賞
過疎地の活性化の取組が評価。住民グループの受賞は初めて。

プロセス6 平成20年～
TOTO（株）がCSR活動を開始

どんぐりの森づくり活動でどんぐりの苗を植樹。



高根集落でのCSR活動

プロセス7 平成22年～
キヤノンマーケティングジャパン（株）がCSR活動を開始

棚田の米作りや集落行事に積極的に参加。



高根集落でのCSR活動

PICKUP! 平成25年 「第1回634サミット」に参加し観光庁長官賞受賞
スカイツリーの高さ634mになぞらえたイベント。天蓋山（てんがいさん）が標高634mのため参加し、米販路拡大に繋がる。

プロセス8 平成28年
「（一社）高根コミュニティラボわぁら」を設立

新たな高根集落ファン獲得に向けて集落内の若い人たちと一緒になった取組を開始。


「わぁら」のゲストハウス

PICKUP! 令和2年度（第59回）農林水産祭 天皇杯受賞
都市交流や閉校した校舎を活用した食堂の開設を始め、20年以上にも及ぶ地域活性化の取組が高く評価された。

高根集落の今後の展望は

中山間地域の田んぼは、利益の出る仕事ではなく、専業農家だけを増やしていけば良いということではない。集落内の組織や関係性の再構築、近隣集落との連携が必要で、この高根集落で米を作りたいと思う人たちとの協力関係を作っていかなければならない。高根集落での農業と「高根の棚田」の魅力発信のため、集落の人々が集落内の魅力を考えていく意識づけと、それを形にする活動を継続することが大事な取組となっていく。

取組によって起こった変化

団体との連携	——	3団体（現在）
宿泊施設	————	3軒（現在）
移住者数	————	5名（現在）

小千谷市真人町若栃集落

(株)Mt.ファームわかとち

若栃の棚田

地域の概要

若栃集落は、小千谷市南部の山間部に位置し、積雪量が毎年3～4mを記録する豪雪地帯で山の斜面に家々が寄り添うように集まった人口約100人の集落である。

平成16年の新潟県中越大震災で甚大な被害を受け、「このままでは集落の活力がなくなる」という危機感を抱いていた。

「若栃集落を何とか活気づけよう」という集落の人々の思いから、若栃集落の地域づくりを推進する「わかとち未来会議」を設立し、グリーン・ツーリズム事業による地域活性化の取組がスタートした。その取組がきっかけとなり、平成28年に生産組合を発展させた「(株)Mt.ファームわかとち」が設立された。米や野菜の生産と販売、農産加工品の開発、製造、販売をすることで地域活性化と棚田の保全に取り組んでいる。



黄金に実った若栃の棚田



農家民宿「おっこの木」


田植え後の様子

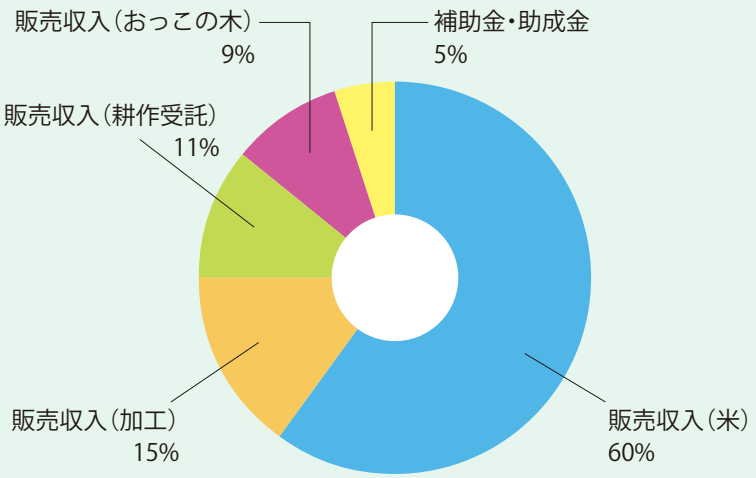
受賞歴

- 平成25年度北陸農政局 農政功績者表彰 北陸農政局表賞 農村振興部門受賞
- 平成30年度北陸農政局 ディスカバー農山漁村の宝 優良事例選定

基本情報

名称	若栃の棚田
枚数	約400枚
耕作面積	約38ha
耕作率	約100%
標高範囲	150～300m
平均勾配	1/14
法面の構造	土羽(土坡)
水源	湧水
保全団体	中山間地域等直接支払 若栃集落協定

活動資金



地域における取組のキーワード

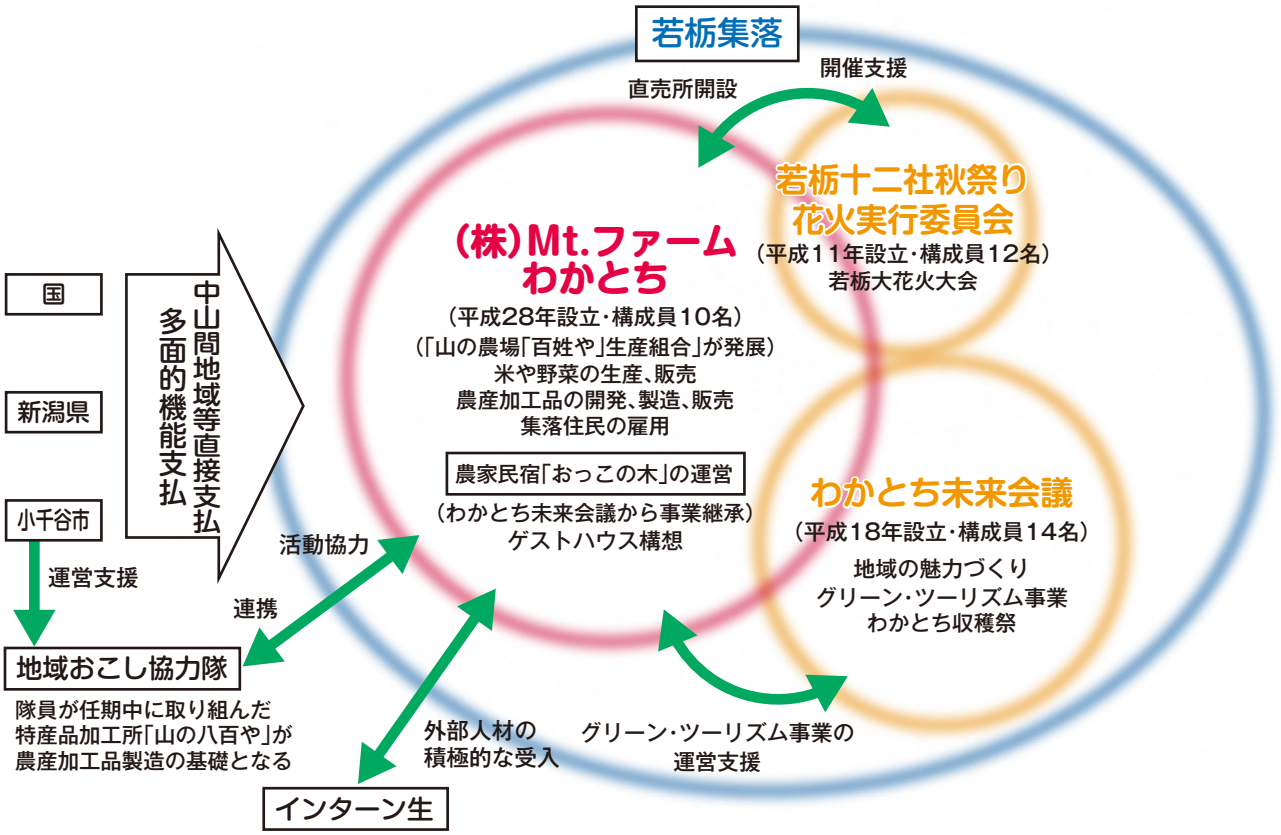
- 地域おこし協力隊
- 教育分野との連携
- 都市農村交流
- 農泊の推進
- 農産物のブランド化
- 農産物の加工販売
- 閉校、古民家等の利活用
- ほ場整備

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 140 540 857*47

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

細金（ほそかね） 剛（つよし）さん

「（株）Mt.ファームわかとち」と「わかとち未来会議」の二本柱で若栃集落の地域活性化を進めています。

新潟県中越大震災の苦境から、若栃集落の元気を取り戻すために、様々なアイデアで地域活性化に取り組んできた細金さん（右）から若栃集落についてお話を伺いました。



若栃の未来を語ってくれた細金 剛さん（右）と創さん（左）

新潟県中越大震災で大きな被害にあった若栃集落の危機感を跳ね返し、何とか活気づけようという思いで、集落がひとつになって設立した「わかとち未来会議」では、グリーン・ツーリズムや様々な活動を通して交流人口を増やしながら、地域活性化に取り組んできました。この「わかとち未来会議」が築いた方向性を、更に拡大するために「（株）Mt.ファームわかとち」を設立し、若栃集落の農業を守りながら、事業を拡大して集落内で安定した収入が得られるような取組を進めています。この二本柱で、若栃集落を更に発展させたいと考えています。

Q 若栃集落の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 新潟県中越大震災以後に立ち上げた「わかとち未来会議」を中心に、グリーン・ツーリズム事業などを通して、外部人材の受け入れや、幅広い交流促進を継続的に行なっています。また、若栃集落の大事な行事である「若栃大花火大会（わかとちおおはなびたいかい）」や「わかとち収穫祭（しゅうかくさい）」などのイベントに積極的に他地域の人を呼びこんでいます。そして「Mt.ファームわかとち」による高齢者でも地元で稼げるシステムづくりを目指し、生き甲斐が感じられる方策を考えながら集落の魅力を発信していく広報活動等を常に行なっています。


Mt.ファームわかとちのメンバー

Q 若栃集落の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A 若栃集落では、4年前からほ場整備事業が始まっていて、農地の整備が進んでいます。農地の保全、ほ場整備がされていなければ、次の若い世代に引き継げませんからね。先人たちが築いた若栃集落の農地があって、今の私たち世代は耕作ができています。これからはその農地を次の若い世代に引き継いでいく準備段階に来ています。若栃集落の担い手も、外から来た人も、ここで稼ぐことができるような基盤を作らなければなりません。そうすることで徐々に集落の力はついてきます。「（株）Mt.ファームわかとち」で考えている色々な構想が、若栃集落の農地を将来に引き継ぐことに繋がると信じています。

若栃集落 取組のプロセス

取組以前

若栃集落は他の中山間地域と同様に、高齢化や担い手不足の不安も抱えながらも、生活は平穏でごくありふれた里山の集落であった。しかし、平成16年、新潟県中越大震災に襲われ、田んぼや家屋は甚大な被害を受け、同時期に集落のコミュニティの中心であった小学校も閉校になり、今までの平穏な日常の全てが大きく変わった。集落の将来への不安が募り、「このままでは集落の活力がなくなる」という危機感を募らせた集落の人々が、元気がなくなった若栃集落を何とか活気づけたいとの思いを膨らませていた。


地震で被害にあった棚田

取組のきっかけとその過程

若栃集落の苦境を打破するために、平成18年に有志が集まって「わかとち未来会議」を設立し、集落の未来について話し合いをスタートした。老若男女問わず多彩なメンバー約30人で、「未来デザインワークショップ」を約25回開催し、若栃集落が震災から復興するのためのプラン、「わかとち未来デザイン」を作り上げた。

最初の活動は、小千谷市グリーン・ツーリズム推進協議会に加入し、小千谷市で初の民泊受入を集落農家の協力で開始した。大学生の受け入れからスタートし、その後は小・中学生、海外研修生まで交流を広げていった。また、花火大会や収穫祭などのイベントを開催して、積極的に他地域の人を呼ぶことにより、外部の人が感じる若栃集落の魅力を知ることができた。

平成22年の農家民宿「おっこの木」の開業により、更に交流人口が増加し、「おっこの木」は集落の人々の雇用の場になった。また、同年に設立した「山の農場「百姓や」生産組合」は、若栃集落の棚田を保全し、集落の人々による農作業全般の協働を形づくり、集落内の結束を高めていった。地域おこし協力隊員が集落の人々と取り組んだ「山の八百や」は、農家から山菜、野菜を買い取り、農産加工品として販売する「集落で儲ける」仕組みであった。「わかとち未来デザイン」で策定した活動は実行され、集落の復興と地域活性化の取組は加速していった。


おっこの木

キーポイント （株）Mt.ファームわかとちを設立

「山の農場「百姓や」生産組合」の活動は、主に集落内の労働力の軽減が目的であったため、集落の人々は活動の発展に限界を感じていた。若栃集落で作る米の美味しさ、農産物の安全には自信があった集落の人々は、「山の農場「百姓や」生産組合」と特産品加工所「山の八百や」の活動を次のステップに進めて、より「集落で儲ける」活動にするため、平成28年に「（株）Mt.ファームわかとち」を設立した。



Mt.ファームわかとちの設立

集落内の高齢者に漬物を作る加工所で働いてもらい、会社として集落内に雇用の場を生み出した。さらに、会社が農産加工品を販売して集落の人々に利益を還元し、より元気な若栃集落になることを目指した。

法人化のもう一つの目的は、「安さ」とは違う付加価値を求めている人たちに向けた「ブランド化」を目指すことである。今までの形では販売する商品に付加価値を付けることが難しく、ボランティア活動だけでは必ず衰退していくため、若栃集落が持つ魅力を商品に最大限に活用する必要があった。今までの農業から、集落全体で価値を高める農業、その魅力をどう発信していけばよいか、取組を進化させることを目指した。

現在

現在、農家民宿「おっこの木」の運営支援は、「わかとち未来会議」から「（株）Mt.ファームわかとち」に事業継承されている。未来会議は地域活性化や交流人口拡大の推進方法を検討する「協議機能」、会社は集落内の経済活動の「実行機能」に役割を明確に分けて取り組んでいる。


米のブランド化

若栃集落の米や野菜は、土や水に恵まれ、寒暖差もあることで美味しいと好評で、更に付加価値を付けてブランド化する新たな企画商品として米飯パックの販売を開始した。現在の販路は卸、個人販売、ふるさと納税が中心だが、時代のニーズに合ったインターネット通信販売を予定している。また、会社で取り扱う農産物は、集落内の農家からの仕入れと自社生産が半々程度だが、今後更に高齢化して農業ができなくなった田んぼを会社で受け入れていく体制づくりを進めている。

若栃集落の人々は、「農」に関することは「（株）Mt.ファームわかとち」に任せ、会社は集落の人々に利益を還元できるように、集落と会社が共に寄り添い、取組を継続している。

プロセス1 平成11年～ 「若栃十二社秋祭り花火実行委員会」を設立、若栃大花火大会の開催

「若栃十二社秋祭り」として現在も続く若栃集落の大切な地域活性化のための行事。小千谷三大花火のひとつで、たくさんの奉納花火が打ち上げられる。



若栃大花火大会

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

プロセス2 平成16年 新潟県中越大震災が発生し若栃集落も甚大な被害を受けた

「このままでは集落の活力がなくなる」という危機感から、集落の人々は元気がなくなった若栃集落を活気づけようという思いを膨らませた。



わかとち収穫祭

プロセス3 平成17年 「わかとち収穫祭」の開催

震災の被害にあった集落の人々に元気を取り戻してもらうために始まった祭り。むじな※酒を妙義山神社へ奉納。田楽踊り(若栃大田楽)が披露される。

※むじな：アナグマ



わかとち未来会議

プロセス4 平成18年 「わかとち未来会議」を設立

若栃集落の苦境を打破するために有志が集まって地域活性化の取組をスタートした。

プロセス5 平成18年 小千谷市グリーン・ツーリズム推進協議会に加入

小千谷市で初の民泊を行い、他地域の交流で若栃集落が持つ価値を改めて感じることができた。



グリーン・ツーリズム民泊

プロセス6 平成22年 「わかとち未来会議」が農家民宿「おっこの木」を開業

交流人口が増加し、集落の人々の雇用の場になった。



おっこの木

プロセス7 平成22年 「山の農場「百姓や」生産組合」を設立

若栃集落の棚田を保全し、集落の人々による農業生産の協業を図る組織。

PICKUP! 地域おこし協力隊の受入を開始

特産品加工所「山の八百や」で、山菜や野菜を買い取り、加工、販売する活動を行なった。



山の八百や

プロセス8 平成28年 「(株)Mt.ファームわかとち」を設立

米や野菜の生産と販売、農産加工品の開発、製造、販売事業を強化した。

平成29年：多面的機能支払取組開始

PICKUP! 農産物のブランド化を推進

新たな企画商品として米飯パックの販売を開始。



農産加工品



Mt.ファームわかとち

若栃集落の今後の展望は

消費者と生産者が信頼関係を結びながら、年間契約で1年を通じて農産物を提供する直接的な関係づくりを目指している。天候により収穫量が変わるリスクもあるが、安定した収入を得ることで生産者は計画的な仕入れや、設備投資ができるようになる。米での関係づくりは準備が始まっており、他の農産物、農産加工品についても、家庭内の食卓に上がる食材によって、より強く若栃集落と消費者を繋げていく消費活動を提案していきたい。

取組によって起こった変化

農家民宿「おっこの木」利用者数

350人(平成25年) → 450人(令和元年)

米・野菜・農産加工品売上

9,000千円(平成25年) →35,000千円(令和元年)

十日町市松代

NPO法人 越後妻有里山協働機構

松代・室野・星峠棚田

地域の概要

松代地域は、十日町市西部（旧松代町）の山間部に位置し、日本有数の豪雪地帯である。また、松代地域の棚田は「越後松代棚田群」とも呼ばれ、その景観の良さから全国から数多くの観光客が訪れることで有名である。

松代地域は、過疎化・高齢化が深刻な問題で、担い手不足から美しい棚田も耕作放棄地が増える状況にあった。

平成12年からは国際芸術祭「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」が越後妻有※で始まった。「大地の芸術祭」の作品メンテナンスや拠点運営をする「NPO法人 越後妻有里山協働機構」を平成20年に設立し、棚田保全を目的とした活動として「まつだい棚田バンク」オーナー制度も開始した。平成27年には農業実業団サッカーチーム「FC越後妻有」を結成し、松代にしかない取組で、棚田保全と地域活性化の取組を進めている。

※越後妻有：十日町市と津南町の妻有郷からなり、日本一の長さを誇る信濃川中流域に開けた盆地を中心に栄えた地域



星峠の棚田全景　　photo by YONEYAMA Noriko



草間彌生「花咲ける妻有」 photo by NAKAMURA Osamu



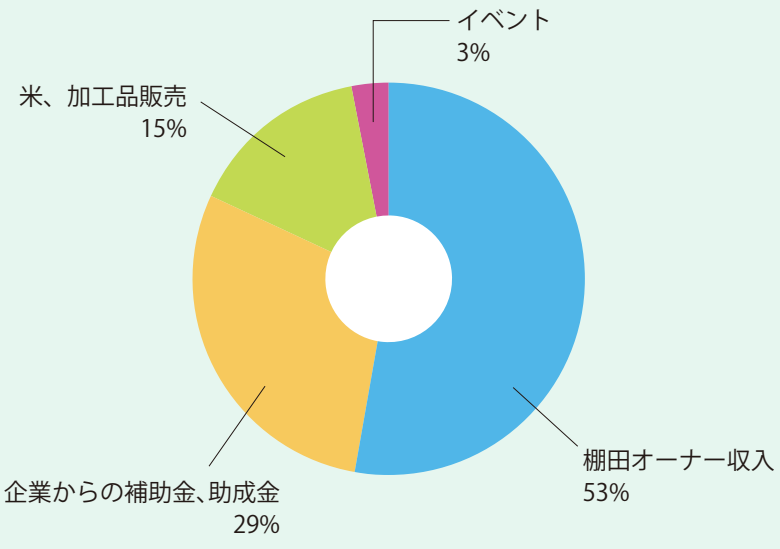
稲刈りを終えた里親　　photo by YANAGI Ayumi

受賞歴　・平成29年度過疎地域自立活性化優良事例 総務大臣賞受賞

基本情報

名　　称	松代・室野・星峠棚田
枚　　数	200枚（星峠棚田）
耕作面積	30ha（星峠棚田）
標高範囲	280～420m（星峠棚田）
平均勾配	1/10（星峠棚田）
法面の構造	土羽（土坡）（星峠棚田）
水　　源	雪解け水、天水（星峠棚田）
保全団体	NPO法人 越後妻有里山協働機構
棚田オーナー制度	平成15年から開始

活動資金



地域における取組のキーワード

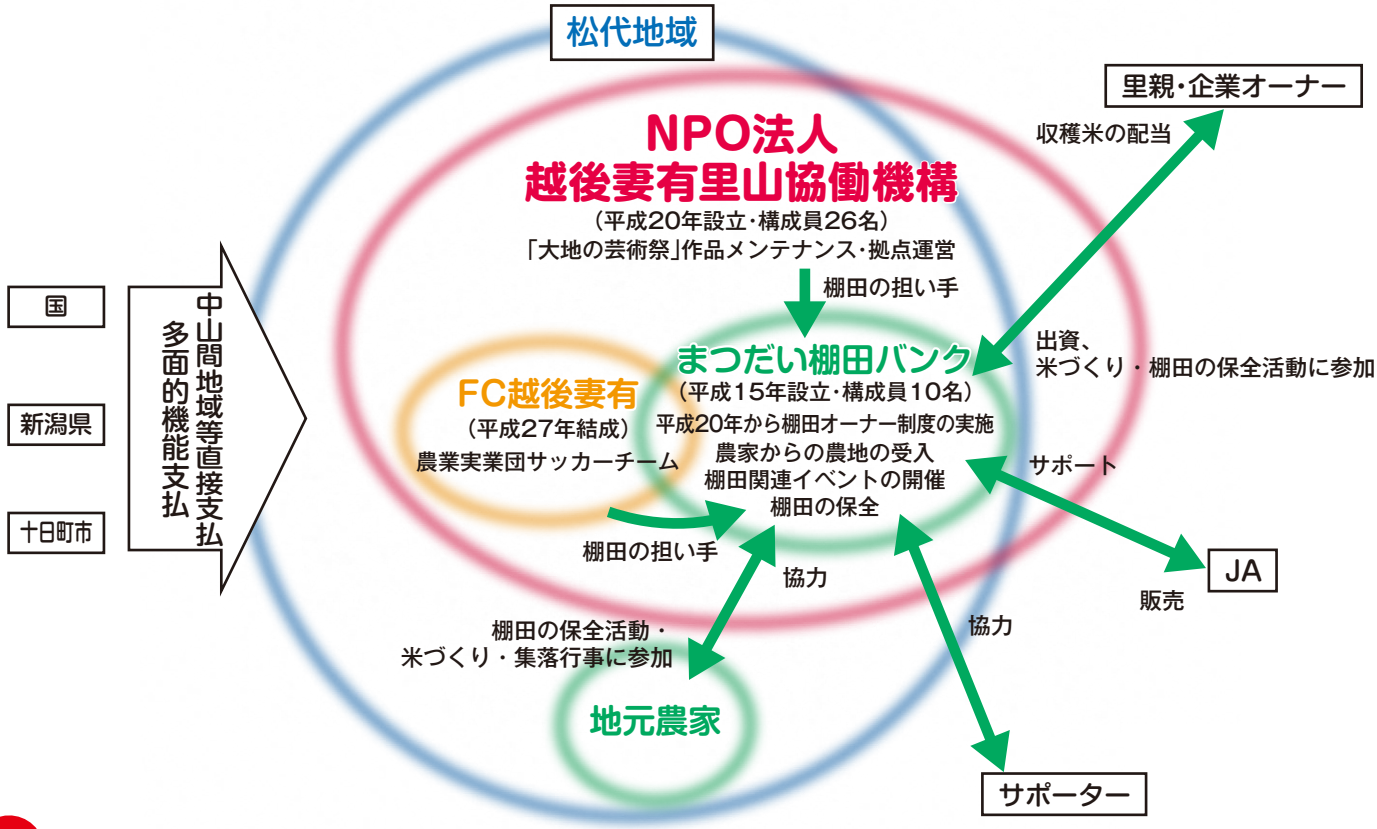
- スポーツ、芸術分野との連携
- 棚田オーナー制度
- 都市農村交流
- 農産物のブランド化

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 298 138 536*58

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

石塚（いしづか） 康太（こうた）さん

これまでの自分の経験を活かしながら、松代地域での農業の基礎をしっかり構築していきます。

令和2年に「NPO法人 越後妻有里山協働機構」の一員となり、松代地域での農業を始めた石塚さん。農業経験者として、これからの松代地域の農業についてお話を伺いました。



松代地域の農業に貢献する「NPO法人越後妻有里山協働機構」のみなさん

以前は平場で農業をやっていましたが、自分の中で収量を大事にする農業に葛藤がありました。そんな時に「NPO法人 越後妻有里山協働機構」の求人を見かけ、ここなら自分らしい農業ができるんじゃないかという思いと、自分が培ってきたスキルが、どれくらい通用するかチャレンジしたいという気持ちでここに来ました。今年は田んぼの水管理や農薬の使い方などを見直して、実際にその効果が表れたのではと思います。来年は更に基盤を固めていくため、その管理をしっかり行うことが目標です。それをベースに耕作する地域を増やしていきたいと思っています。

Q 松代地域の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 「大地の芸術祭」をきっかけとして始まった「まつだい棚田バンク」を棚田の保全活動として、地域の方々と深く関わりながら活動し続けていることです。「地に足をつけ、目は先を見つめる」ということを大切にし、積極的に地域内の行事や道普請（みちぶしん）、品質向上のための農業勉強会などに参加しています。これからも松代地域の担い手と手を取り合い、地域の農業を支えていけるように、棚田保全、棚田バンク会員の募集やPR活動を続けていきたいです。


地元農家から多くを学ぶスタッフ

Q 松代地域の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A プロリーグを目指す女子サッカーチーム「FC越後妻有」の結成は、「まつだい棚田バンク」の大きな変化で、新しいスタイルといえます。また、米のブランド化を進め、「大地（だいち）のお米（こめ）」の販売や、積極的に都内イベントへの出店、店舗への卸販売、都内レストランでのコラボレーション定食の販売など、新たな販売経路の拡大とPR活動に力を注いでいます。また、将来を見据えIT企業と連携し、ドローンを使ったスマート農業の実証実験にも取り組んでいます。こうした新しい活動を取り入れながら、「まつだい棚田バンク」は、松代地域のために前に進み続けています。


ルミネ大船店に出店（令和2年）

松代地域 取組のプロセス

取組以前



イリヤ&エミリア・カバコフ「棚田」
photo by NAKAMURA Osamu

松代地域は、日本の原風景が広がりブナ林や多様な生物が存在する自然豊かなところであるが、過疎化・高齢化が深刻な問題となっていた。平成6年、新潟県が平成の大合併に向けた地域活性化対策を推進する中、越後妻有地域の旧6市町村（十日町市、津南町、川西町、松代町、松之山町、中里村）の首長は、越後妻有地域の活性化はありきたりな事業ではなく、アートを活かしたもので取り組もうと考え、新たな活動として「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」がスタートした。

取組のきっかけとその過程

平成12年から始まった「大地の芸術祭」をきっかけに、松代地域の移住者や地域おこし協力隊の数は少しずつ増えてはいたが、過疎化・高齢化の進行により営農が継続できなくなった棚田の耕作放棄地は増え続けていた。「大地の芸術祭」の総合ディレクターの北川フラム氏は、色々な場所に作品を置かせてもらった地域の方々に少しでも恩返しがしたいという思いから、越後妻有地域の棚田を守っていく必要性を感じ、平成15年、自らが発起人となり、「大地の芸術祭」公式サポーター「こへび隊」と地域の農家が協力して「まつだい棚田バンク」を設立し、棚田の保全活動に着手することとなった。

キーポイント まつだい棚田バンクの活動がはじまる



まつだい棚田バンク

平成20年に「大地の芸術祭」の作品メンテナンスや拠点運営をする「NPO法人 越後妻有里山協働機構」を設立した。「NPO法人 越後妻有里山協働機構」は、「大地の芸術祭」のプロジェクトのひとつとして、地域住民たちとの交流と、棚田保全活動を目的とした「まつだい棚田バンク」棚田オーナー制度を導入、専従スタッフを雇用して取組を開始した。

取組開始当初は個人の里親（棚田オーナー）を募集し、翌21年には法人コースをスタートさせた。棚田オーナー制度の面積が増えていく中で、企業オーナー向けに研修プログラムやセミナーを企画して、募集の取組を拡大していった。

越後妻有地域全体で年々進行する過疎化・高齢化が深刻な問題であることに加えて、中山間地域の棚田は平場に比べて管理が大変なため、農業を引退する農家は年々増えていた。「NPO法人 越後妻有里山協働機構」は、「まつだい棚田バンク」の仕組みを通して個人や企業の支援のもと、営農が継続できなくなった田んぼをできる限り多く引き受け、耕作しながら美しい棚田を守っている。

キーポイント 半農半スポーツの新たな試み



FC越後妻有

「NPO法人 越後妻有里山協働機構」は、新たな取組として、平成27年に農業実業団サッカーチーム「FC越後妻有」を結成した。松代地域の耕作放棄地が増えている現状と、女子サッカーのプロ活動の厳しさから、農業のマイナス面と女子サッカーのマイナス面を掛け合わせ、双方プラスにできないかという発案で実現した。この新たな発想は、初年度こそ地域の人々に「本当にやっていけるのか？」という思いで受け止められたが、農業とサッカー、地域の活動をひたむきに取り組む姿を目の当たりにし、今では地域の大事な担い手として応援されている。また、スパイクと長靴という「二足のわらじ」は、他では類をみない取組として注目を集めている。

現在

令和2年、「まつだい棚田バンク」は農業を志す若いスタッフも加わり、専従スタッフ3名が松代地域の星峠、室野、松代の棚田を中心に働いている。平成20年、「まつだい棚田バンク」のスタート時は農業未経験者1名での活動で、地域の師父※から色々と農業を教えてもらい、「まつだい棚田バンク」の基盤を作ってきた。現在の3名のスタッフも、地域に何名かいる師父から直接農業の指導を受けたり、「大地の芸術祭」が開催される年には、その活動にも協力してもらっている。様々な場面で常に一緒に行動しているのではないかと思うほど地域の人々との関係性は深く、密接に関わっている。「まつだい棚田バンク」とそのスタッフは、この地域の一員という立場で地域に溶け込み、松代地域の棚田の保全と地域活性化に取り組んでいる。



まつだい「農舞台」

※師父：イベントの際にご指導いただく地元の師匠

プロセス1 平成12年

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000」第1回が越後妻有で開催

新潟県の平成の大合併に向けた地域活性化対策「妻有郷アートネックレス整備構想」のもと、北川フラム氏を総合ディレクターに迎えて越後妻有で開催された。



作品が置かれた棚田

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

プロセス2 平成15年

「まつだい棚田バンク」を設立

北川フラム氏が発起人となり、大地の芸術祭公式サポーターの「こへび隊」と地域の農家が協力し、「まつだい棚田バンク」を立ち上げた。



トークショー



まつだい棚田バンク
photo by YONEYAMA Noriko

プロセス3 平成20年

「NPO法人 越後妻有里山協働機構」を設立

「大地の芸術祭」の作品メンテナンスや拠点運営をする団体として設立。「まつだい棚田バンク」棚田オーナー制度を導入、専従スタッフを雇用して取組を開始した。

PICKUP! 平成21年 耕作エリアの拡大

個人の里親からの募集に加えて、企業向け法人コースの募集を開始した。

平成26年：多面的機能支払取組開始

プロセス4 平成27年

農業実業団サッカーチーム「FC越後妻有」を結成

農業のマイナス面と女子サッカーのマイナス面を掛け合わせて双方プラスにできないかという発想から農業実業団サッカーチーム「FC越後妻有」を結成した。



FC越後妻有
photo by HOSHINO Miho

PICKUP! 平成28年 棚田オーナー制度の面積と会員数が日本一に

越後妻有の美しい棚田を守るための棚田保全活動に力を入れていく中で、大地の芸術祭で培ったネットワークを活かして会員数が年々増加。



室野の棚田

PICKUP! 平成30年 ブランド米「大地のお米」の販売開始

米のブランド化や、オリジナル商品の開発に加え、都内のイベントに積極的に参加するなど、PR活動を展開。



オリジナル商品の数々



「大地のお米」

PICKUP! 令和元年 棚田の保全面積が10haを超える

先祖代々守ってきた田んぼを、高齢などの理由で引退する農家から託され、できる限り「まつだい棚田バンク」で耕作を引き受けた。

プロセス5 令和2年

「まつだい棚田バンク」専従スタッフを増員

農業を志す若いスタッフも加わり、専従スタッフ3名が松代地域の星峠、室野、松代の3地域の棚田を中心に活動をしている。

PICKUP! 令和2年 スマート農業の実証プロジェクトをスタート

IT企業と連携し、条件不利な中山間地域のほ場でスマート農業の実証実験に取り組んでいる。



ドローンを使った実証実験

松代地域の今後の展望は

全国で、里親数・棚田オーナー制度の面積共に日本一となった要因は「大地の芸術祭」の効果が大きい。「NPO法人 越後妻有里山協働機構」として「棚田を守ることで芸術祭も守る」という思いで活動を継続していくこと、個人や企業の支援のもと、「まつだい棚田バンク」の活動を通してこの美しい棚田を地域と共に守っていくことが松代地域での役割と考えている。そのために、今後も活動を活発化させ、棚田を保全する力を付けていくことを一番の目標としている。

取組によって起こった変化

「まつだい棚田バンク」の里親数

	2007年		現在
標準コース	40口	→	39口
法人コース	0口	→	8口
小口コース	25口	→	240口

津南町三箇

三箇地区都会との交流を進める会

鹿渡・鹿渡新田棚田

地域の概要

三箇地区は、津南町北部の信濃川沿いに位置し、鹿渡、鹿渡新田、辰ノ口の3集落から成る地区である。前後を山と川に挟まれた土地で、鹿渡、鹿渡新田は津南町の中で最も水田面積の少ない集落である。

津南町全体で若い人が仕事を求めて地域を離れる傾向が強く、人口減少と高齢化が深刻な問題となっている。

三箇地区では人手不足による耕作放棄地を極力出さないこと、集落をこれからも存続させたいとの思いから有志で「三箇地区都会との交流を進める会」を設立した。閉校となった三箇小学校を地域コミュニティーの拠点とし、都会の小学生の農業体験や移住お試し体験ツアーを行なっている。近年は、地域おこし協力隊の出身者が三箇地区に移住し、新たな価値観と発想力を持って地区のための活動をしている。



鹿渡の棚田全景


鹿渡の棚田


作業体験での稲刈りの様子

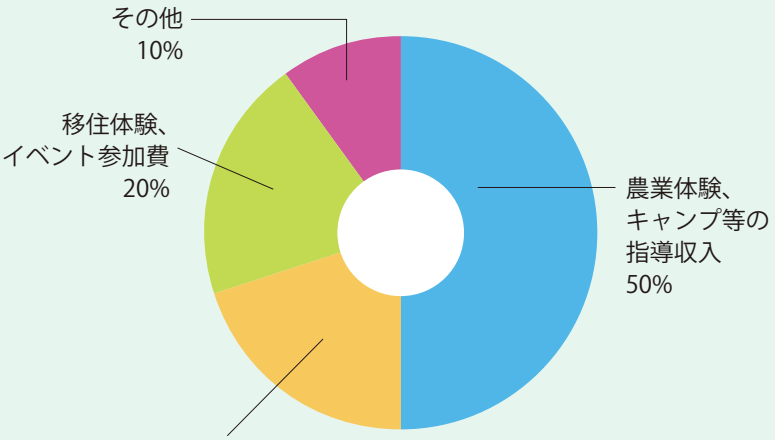
受賞歴

・平成29年度第16回住みよい町づくり
妻有ショッピングセンター環境大賞受賞

基本情報

名称	鹿渡・鹿渡新田棚田
枚数	150枚
耕作面積	約10ha
耕作率	約72%
標高範囲	180～250m
平均勾配	1/15
法面の構造	土羽(土坡)
水源	屋敷平ため池
保全団体	中山間地域等直接支払鹿渡集落協定 鹿渡集落農地水保全会 鹿渡新田農地水保全会

活動資金



地域における取組のキーワード

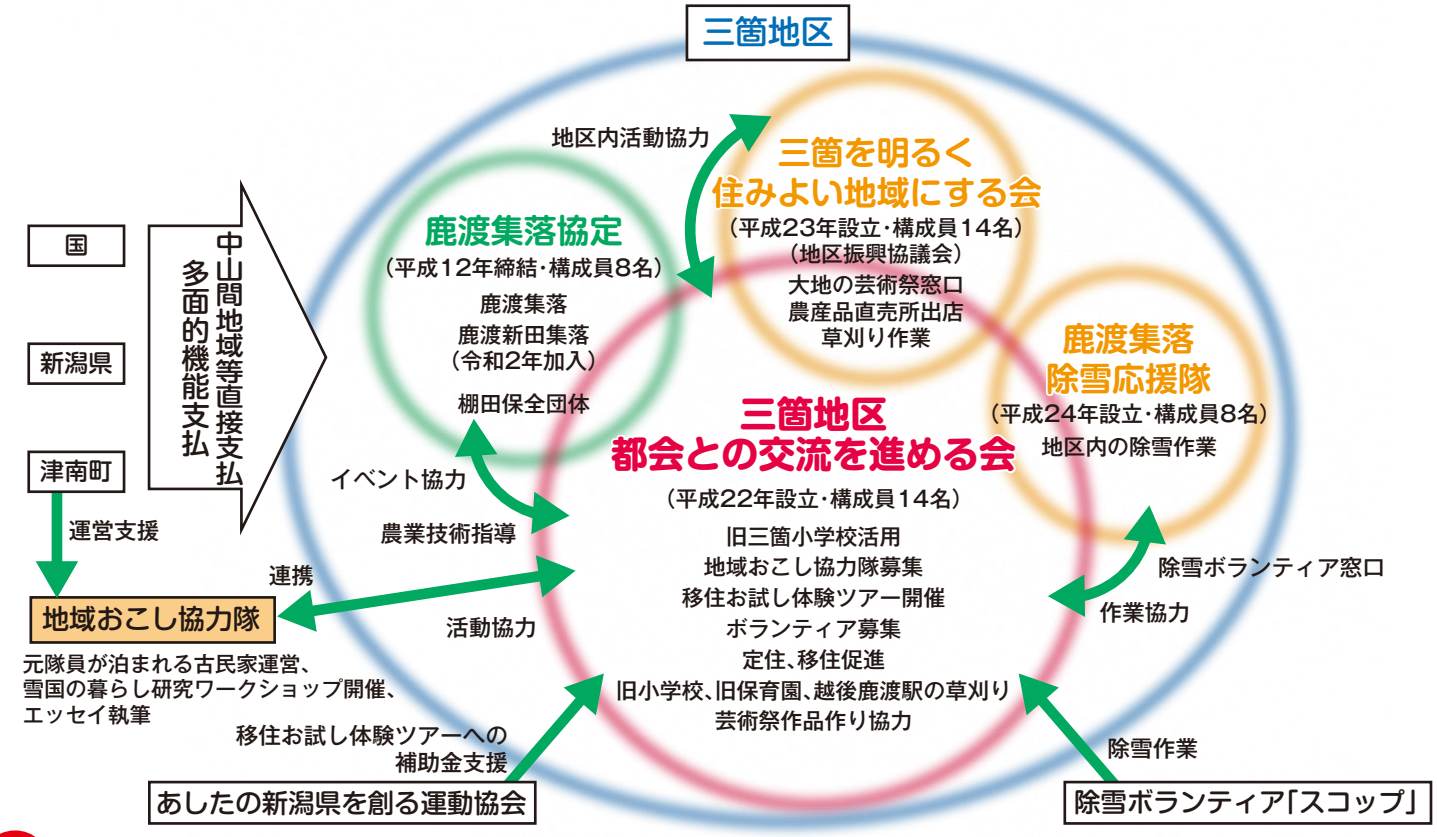
- 地域おこし協力隊
- 教育分野との連携
- 都市農村交流
- 移住定住の促進
- 閉校、古民家等の利活用
- ほ場整備

アクセスはこちらから

MAPCODE® 253 456 513*85

<MAP>

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

恩田（おんだ） 稔（みのる）さん

私たちが今やっていることを継続していけば、もっと地区に来てくれる人は増えると期待しています。

「三箇地区都会との交流を進める会」の会長で、「だいすきさんが 旧三箇小学校」で農業体験、地域おこし協力隊の受入などを進める恩田さんから三箇地区についてお話を伺いました。



元気のいい三箇地区であり続けるために頑張る恩田 稔さん

旧三箇小学校は、地区のコミュニティの拠点であり、地域おこし協力隊の事務所としても活用しています。校舎も令和元年に宿泊所の許可を取ったことで、今まで以上に来訪者の受入態勢は整っています。交流事業を地区全体の取組と考えて進めなければ、恐らく人は増えないと思います。

「三箇地区都会との交流を進める会」は、地域おこし協力隊との連携を強め、これからも地域活性化に取り組みます。そのひとつとして棚田も守っていかなければなりません。自分たちが今やっていることを継続していれば、来てくれる人は増えていくと期待しています。

Q 三箇地区の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 除草剤を使わずに、1年に5～6回草刈りをやっています。この地区の田んぼは、津南町の中で一番きれいだと自負しています。農道は管理の軽減のために除草剤を撒こうという話もありますが、除草剤は撒けば全て水に混ざって田んぼに流れてしまうので使っていません。草刈り機の作業はきつく、危険で、それをいつまで続けていけるか分かりませんが、現在は地域おこし協力隊の2人にも草刈りに参加してもらっています。継続のためにも今後の課題として、草刈りを含むボランティアツアーなども計画しています。


草刈りを怠らない三箇地区の田んぼ

Q 三箇地区の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A 農業体験でたくさんの子どもたちが三箇地区に来るようになった頃から、地区では外の人たちを受け入れようとする雰囲気ができてきたことです。少なくとも「三箇地区都会との交流を進める会」ができる前には、そのような風土はこの地区にはありませんでした。人口が減っていく現状を理解しつつも、具体的な活動には至っていなかった住民が、積極的に地域おこし協力隊の受入や、「移住お試し体験ツアー」に協力するようになりました。「三箇地区都会との交流を進める会」を組織して、外との交流の受け皿を作ったことで、地区全体の気持ちが高まってきたのが一番の変化だと思います。

三箇地区 取組のプロセス

取組以前

三箇地区の3集落は津南町の中でも特に水田面積の少ない集落であり、多くの農家は自分の家で食べる分と兄弟や親戚に送る程度の米しか作らなかった。このため、ほ場整備には消極的であり、特に鹿渡、鹿渡新田の集落では、水田面積が少ないため農業振興地域制度の農用地申請をしなかった。しかし、人口減少と高齢化により耕作ができない家から、余力のある家に農作業委託が進むと、一人当たりの耕作面積が増えていった。将来的に、耕作放棄地を出さないための取組の必要性を感じ、平成12年の中山間地域等直接支払「鹿渡集落協定」締結を始め、ほ場整備にも取り組んだ。

取組のきっかけとその過程


旧三箇小学校

平成22年に、「三箇地区都会との交流を進める会」が設立されたきっかけは、この年に二つの出来事が同時に起きたからであった。一つは平成22年3月の三箇小学校の閉校である。この時、地区の人々は地元から学校がなくなることへの不安や、地区が衰退していくのではという思いを感じていた。もう一つは、神奈川県の国立附属小学校の先生が、児童の体験教育の場として使われなくなった学校を探していて、三箇小学校の閉校を知り連絡してきたことであった。二つの出来事がきっかけとなり、旧三箇小学校で外との交流活動をするために、地区の合意により「三箇地区都会との交流を進める会」が設立された。


小学生の農業体験の様子

旧三箇小学校を組織の拠点にして、他地域の小学校の体験学習の場を準備した。さらに、地区の各家庭に児童の受入を協力してもらい、児童の農業体験の場を提供した。久しぶりに子どもの声が聞こえることに地区の人々は喜びを感じ、児童が来てくれることを心待ちにするようになり、地区内の雰囲気も少しずつ変わっていった。

キーポイント 地域おこし協力隊員の移住がきっかけの「移住お試し体験ツアー」


移住お試し体験ツアー

平成27年に最初の地域おこし協力隊を受け入れた。隊員は任期中に組織の活動にも協力してもらい、任期満了後にはこの地を気に入り移住した。

この隊員の外からの視点が、三箇地区の取組に新たな発想となる「移住お試し体験ツアー」をもたらした。地区の人々が感じることのない、三箇地区の魅力や都会とのギャップは、ツアーのアピールポイントになった。また、ツアー内容に、「都会の人は季節ごとの生活の違いに魅力を感じる」という隊員のアイデアが活かされ、11月・2月・5月の3回セットでツアーをスタートした。参加者からは「季節によって見える景色や生活がこんなに違うんだね」と肌で感じて感動してもらった。参加者視点の意見・感想は、現在の体験ツアーの内容に活かされている。

「移住お試し体験ツアー」の参加者には、その後は個別に連絡を取り合い、「いつでも来てください」と伝えている。もし、実際に移住する場合には何度も足を運んでもらい、三箇地区を良く見てもらった上で判断してほしいと考えている。

現在


三箇地区

旧三箇小学校を体験交流の場とし、現在までに3,500人以上の人がこの三箇地区を訪れている。令和元年と2年に受け入れた地域おこし協力隊員は、「移住お試し体験ツアー」の参加者であった。「三箇地区都会との交流を進める会」の取組は地域おこし協力隊の協力もあり、ツアー参加者数に一定の効果が表れてはいるものの、未だ確実な移住・定住に繋がっているとはいえない状況にある。しかし、地区の人々が外の人を受け入れる気持ちに変化したことは事実で、今後は更に来訪者増加のための情報を発信していく。

「三箇地区都会との交流を進める会」は、「大地の芸術祭」の地区窓口や直売所の出店、駅やグラウンドの草刈り作業をする三箇地区全戸加入の組織「三箇を明るく住みよい地域にする会」や積雪時の除雪をサポートする「鹿渡集落除雪応援隊」、体験ツアー内の棚田関連イベントで技術指導してもらう中山間地域等直接支払「鹿渡集落協定」とも連携して、三箇地区の維持と活性化に取り組んでいる。

今のままでは近い将来、高齢化により三箇地区の農業人口はわずかになり、田んぼも維持できなくなると思われる。今後も三箇地区が明るく元気な地区であるように、また、地区を離れた人たちに元気な様子を見てもらい、戻って来てもらえるように移住・定住のための活動を今まで以上に進めていく。そして、三箇地区内での共助の部分を組織として様々な活動でサポートし、地区との共存関係を維持しつつ、共に三箇地区を作り守っていくことを目標として活動を継続していく。

プロセス1 平成12年

中山間地域等直接支払「鹿渡集落協定」を締結

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

鹿渡集落で中山間地域等直接支払交付金の取組を開始し、整備が必要な田んぼのほ場整備にも取り組んだ。令和2年からは「鹿渡集落協定」に鹿渡新田集落も加入した。

プロセス2 平成22年

三箇小学校の閉校

地元から学校がなくなることへの不安や地区が衰退していくのではという思いをかなり多くの人が感じていた。



旧三箇小学校

PICKUP! 平成22年 神奈川県の国立附属小学校の先生からの連絡

閉校した三箇小学校を児童たちの教育に使わせてほしいという依頼があった。

プロセス3 平成22年

「三箇地区都会との交流を進める会」を設立

三箇小学校の閉校などがきっかけとなり、他地域との交流活動を推進するため、「三箇地区都会との交流を進める会」を設立した。

プロセス4 平成22年

他地域の児童を迎えて体験学習を実施

各家庭に児童の受入の協力をしてもらい、児童への農業体験の場を提供した。



小学生の農業体験の様子

PICKUP! 平成24年 農地・水保全管理（多面的機能）支払交付金の取組開始

各集落で開始した取組は現在、津南地域農地・水保全組織として津南町一体での取組となった。

平成24年：農地・水保全管理支払取組開始

プロセス5 平成27年

最初の地域おこし協力隊を受け入れる

平成30年3月の任期満了後に移住し、地元の古民家を改修、泊まれる古民家「Classic Lab 柳の家」を運営し、雪国の暮らしを研究するワークショップ、エッセイ執筆などを行なっている。



最初の地域おこし協力隊員

プロセス6 平成30年～

第1回「移住お試し体験ツアー」をスタート

地域おこし協力隊員が、自身の移住経験を参考にして企画を実現。現在、参加者の宿泊と交流会は「Classic Lab 柳の家」を利用している。



移住お試し体験ツアー

プロセス7 令和元年～

新たな地域おこし協力隊を受け入れる

令和元年の2人目、令和2年の3人目の地域おこし協力隊員となった2人は、どちらも移住お試し体験ツアーの参加者。



地域おこし協力隊

三箇地区の今後の展望は

地域おこし協力隊員が発想した「移住お試し体験ツアー」は、三箇地区の交流人口を増加させた大きな取組であった。今後はこの取組を拡大して、ブナ林の自然散策や、農地の草刈りのボランティアツアーなども計画している。さらに、旧三箇小学校は宿泊所の許可を取ったことで、活用促進も期待される。閉校になった学校への依頼は、教育関連の内容が多く、積極的に受け入れて地域活性化に繋げたい。

取組によって起こった変化

地域おこし協力隊受入人数
3名（現在）

「移住お試しツアー」参加者数
35名（現在）

柏崎市高柳町門出

門出棚田愛農会

大開の棚田

地域の概要

門出集落は、柏崎市南部（旧高柳町）の山間部に位置し、山沿いに急傾斜な棚田の多い集落である。農家の冬の副業として門出集落に根付いた「越後門出和紙」は、雪ざらしの工程が特徴である。

門出集落の中にある「大開の棚田」は、特徴的な菱形で整備された棚田とその周りの景観の良さから、平成11年に「日本の棚田百選」に選定されて注目されたが、高齢化による耕作放棄地が深刻になっていた。

「荒れた棚田は見せたくない」と、平成17年に有志が「門出棚田愛農会」を設立し、耕作放棄地解消に取り組んだ。また、外部との交流（宿泊施設、草刈りボランティア、棚田オーナー制度）にも力を注ぎ、「大開の棚田」から1枚も田んぼを減らしたくないという思いで、集落がひとつの家族のように助け合いながら活動を続けている。



大開の棚田全景


門出かやぶきの里

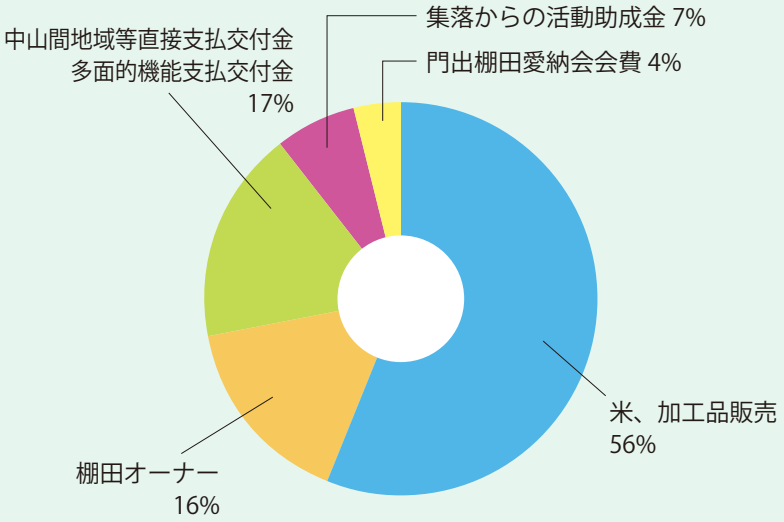

冬の大開の棚田

受賞歴　・日本の棚田百選「大開の棚田」

基本情報

名称	大開の棚田
枚数	31枚
耕作面積	約2.3ha
耕作率	約100%
標高範囲	120～160m
平均勾配	1/8
法面の構造	土羽（土坡）
水源	小川入川
保全団体	門出棚田愛農会
棚田オーナー制度	平成22年から開始

活動資金



地域における取組のキーワード

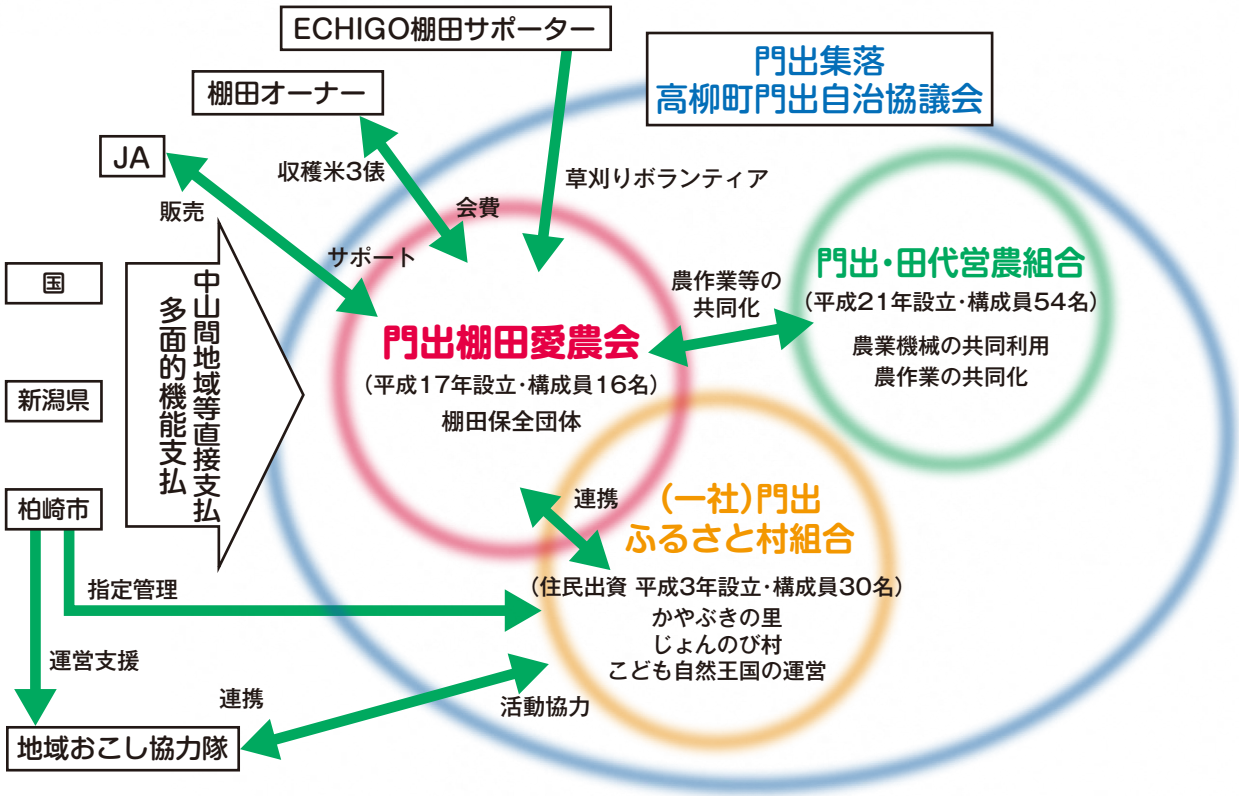
- 地域おこし協力隊
- ボランティアとの連携
- 棚田オーナー制度
- 都市農村交流
- 農泊の推進
- 農産物のブランド化
- 伝統文化の継承
- 閉校、古民家等の利活用
- ほ場整備

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 298 388 014*66

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

中村 圭希(なかむら けいき)さん

「大開の棚田」や「門出(かどいで)かやぶきの宿(やど)」、そして人。すべてがそろって一つの門出ブランドです。

門出集落を様々な角度から見つめて、常に仲間たちと共に将来を考えている中村さん(右)から門出集落についてお話を伺いました。



門出集落への思いを語る中村 圭希さんと小林 専吉さん(左)

私たちは先人から受け継いできた門出集落の棚田を多くの人に見てもらえるよう、常に生き生きと前向きに集落の活性化や営農に取り組んでいます。

門出集落は、棚田を維持・保全する「門出棚田愛農会」と、かやぶきの宿を運営する「門出(かどいで)ふるさと村組合(むらくみあい)」を中心に、集落が一つの家族のように笑顔で助け合いながら活動を続けています。1枚でも田んぼを減らしたくない。そういう気持ちで、門出集落全体の将来を考えています。以来、「身の丈の交流、無理をしない、門出らしさを失わない」を心掛けています。

Q 門出集落の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 伝統的な稲作にまつわる「鳥追(とりお)い」や「稲虫送(いなむしおく)り」といった祭事を継承し続けることですね。

1月の「鳥追い」はどんど焼きと言われることも多い小正月の行事で、門出集落では「鳥追い」と言います。夜明け前に藁(わら)を積み上げて火を焚き、朝になったら囃子(はやし)歌を歌って鳥を驚かせて追い払うという祭事です。「稲虫送り」は、7月の暑い時期に稲に着く虫を追い払うためのお祭りで集落内を歌いながら練り歩きます。棚田と共に生きる門出集落ならではの風習が続いていることは、門出らしさを失わないために重要なことなのです。


鳥追い

Q 門出集落の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A 親の代で門出集落から引越しした家族の子どもが、おじいちゃんの暮らす集落で農業をやってみたいという気持ちから、Iターン(孫ターン)してきたことですね。今は2人の若者が、将来門出集落で専業農家として自立することを目指して修行の真っ最中です。Iターンや、独自に農家の門を叩く新たな担い手が生まれたことは、移住者の受け入れを進めたい門出集落にとって明るい出来事ですね。新しい担い手となった2人は、重宝がられて近くの集落からも農作業の手伝いなどを依頼されています。この2人が門出集落に根付くきっかけが生まれたことが大きな変化ですね。集落を元気にしてくれることを大いに期待しています。

門出集落 取組のプロセス

取組以前

門出集落は、元々大規模な農家がおらず、高齢化から耕作放棄地が問題となっていた。ほ場整備前は機械化も進んでおらず、農作業が困難な田んぼを「先人から受け継いだ土地だから仕方がない、しょうがない」という気持ちで耕作していた。

昭和50年代にほ場整備が行われ、急な地形勾配でも安全に走行できるよう、農道を斜めに整備して、特徴的な菱形の棚田になった。500枚近くあった田んぼは約30枚となり、作業の苦労は軽減された。



ほ場整備以前の大開の棚田

取組のきっかけとその過程

昭和40年代後半から過疎化が進行し、同じ頃、家屋の改築等をきっかけに、この地域のかやぶき屋根はその姿を消していった。このままでは「門出らしさが失われるのではないか」という危機感から、門出集落の若者たちが中心となり、昭和57年に「水曜会」という地域おこしの団体が発足した。

関東での村の特産品を販売する朝市への参加や、かやぶき宿「門出かやぶきの里」の改修など様々な活動を経て、平成3年に「門出ふるさと組合」が設立された。「門出ふるさと組合」が運営する「門出かやぶきの里」は、農村体験宿泊施設として、都会との交流拠点となった。

平成11年に門出集落の「大開の棚田」は、日本の棚田百選に選定された。「百選に選ばれた棚田を見てみたい」という人や「門出」という地名に魅力を感じた来訪者は増えたが、高齢者の離農により、耕作放棄地が増えていた。門出集落の人々は「荒れた棚田は見て欲しくない、せっかく「大開の棚田」を目当てに訪れてくれる人に申し訳ない」という気持ちがあり、耕作放棄地を棚田に戻さないといけないという使命感が芽生えていた。

キーポイント 門出棚田愛農会を設立

耕作放棄地の解消のための検討会は、当時の農協職員の呼びかけで専業農家、自営業、公務員、会社員、建築業、木材業、修理業などの異業種の有志25名が集まった。議論を重ね、平成17年に「門出棚田愛農会」を設立した。



愛農会で購入した機械のデモ



重機を駆使した田んぼの整備

耕作放棄地は、重機を扱える会員の活躍で再生し、稲作に不向きな田んぼでは山菜を栽培して収入源とした。「門出棚田愛農会」の活動は、集落の結束を高めた。

平成21年には「門出棚田愛農会」を母体とした「門出・田代営農組合」を設立した。門出集落と近隣の田代集落が連携して、農業機械の共同利用と農作業の共同化をしたことで耕作放棄地の防止に繋がった。

現在

「門出棚田愛農会」が、「門出」という集落名や、「大開」という縁起の良い名称を活用して何か新しいことを始めたいと考えていた時に、「中山間地域等直接支払制度を活用して発展的は取組をしませんか」という柏崎市の提案があった。「門出棚田愛農会」と柏崎市で「人生の門出を祝って門出集落で棚田オーナーになってみませんか」という企画で交流体験者などにも呼びかけて、平成22年に棚田オーナー制度を始めた。さらに、新しい試みで縁起の良い門出集落の米を結婚式の引き出物としたり、令和元年からは農協の提案で、地域の高校生に卒業記念として「門出米」を贈る取組も始めた。

先人から受け継いできた縁起の良い「門出」、「大開」という名称を大切にしながら最大限に活用し、集落への愛情と誇りをもって、地域活性化に取り組んでいる。



体験交流ほ場の看板



田植え体験

プロセス1 昭和57年

若者有志を中心とした地域おこしの団体「水曜会」を発足

都会との地域交流は、昭和60年頃に西武百貨店開催の「日本の101村展」に参加したことがきっかけとなった。全国的に門出集落の知名度が上がったことで「集落を何とかしなければ」という熱い思いの結束力が強まった。

プロセス2 平成3年

「門出ふるさと村組合」を設立

滞在交流型観光の取組で交流活動の基盤となる住民出資の組織。



門出かやぶきの里

プロセス3 平成11年

大開の棚田が「日本の棚田百選」に選定

門出集落は以前より地域おこしが活発な地域であることが評価され、外部との交流も増えた。

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

プロセス4 平成17年

「門出棚田愛農会」を設立

門出集落の異業種の人々が集まり、耕作放棄地の解消に取り組んだ。田んぼは再生され、稲作に不向きな田んぼでは門出集落の収入源の一つである山菜を栽培した。

PICKUP! 平成18年 ECHIGO棚田サポーターよる草刈りボランティア開始

傾斜地での草刈りは大変な作業だが、門出集落の人々も総出で賑やかに行われている。

PICKUP! 平成18年豪雪

豪雪だったこの年、田植え時期まで雪が消えない心配もあったが、3月に熊本から雪消しを早める炭撒きボランティアが10名訪れた。くん炭や灰を撒くことで雪解けを促進した。



炭撒きボランティア

プロセス5 平成21年

「門出・田代営農組合」を設立

県の「中山間地域豊かな村づくり推進事業」を活用して、営農再編に取り組んだ。



稲刈り体験

プロセス6 平成22年

棚田オーナー制度を開始

PICKUP! 新たな試みとして

柏崎市の呼びかけもあり、縁起のよい門出の米を結婚式の引き出物にした。

平成29年：多面的機能支払取組開始

プロセス7 令和元年～

地域の高校生に卒業記念として「門出米」を贈る

柏崎市や出雲崎町の県立、私立高校や特別支援学校など9校の卒業予定者843人に1袋300グラム入りの米を贈る。



記念の「門出米」

門出集落の今後の展望は

高齢化により農作業ができなくなっても離農という選択をすることなく、生涯農業に関わっていけるよう、「門出棚田愛農会」が地域の仲間意識や強い結束力を持ってサポートに取り組んでいく。それでも耕作できない田んぼは、暫定的に「門出棚田愛農会」が引き受けて、新たな担い手や他の農家への橋渡しをして、今後も可能な限り、頑張り、守り続けて“一集落一農場”のような家族的な取組を続けていく。

取組によって起こった変化

棚田オーナー参加者数		1組（現在）
移住者数	――	5名（現在）
Uターン者数	――	6名（現在）

上越市安塚区細野

自然王国ほその村（細野町内会）

安塚区細野の棚田

地域の概要

細野集落は、上越市安塚区北部の山間部に位置し、周囲に棚田のあるのどかな集落である。近隣集落から山を一つ越えたところにあり、里山の景色が広がる自然豊かな土地であるが、多い年には3mを超える雪が積もる豪雪地帯である。

細野集落は、昭和50年代初めには、過疎化・高齢化による棚田の担い手不足、耕作放棄地の問題が深刻化していた。

細野集落の人々は、危機を察して「あじさいクラブ」を設立し、県内外の地域おこしの先進地を夫婦同伴というスタイルで視察した。他地域から取組のヒントを学びながら、平成元年に「自然王国ほその村」を設立。集落民総参加で新しい村づくりを進めるための組織として設立し、所得と雇用を集落内で生みだす仕組みは他地域の取組のモデルとなった。取組当初、他地域への視察を積極的に行なっていた細野集落は、逆に他地域から視察される集落として知られるようになった。



細野の棚田全景


田植えの様子

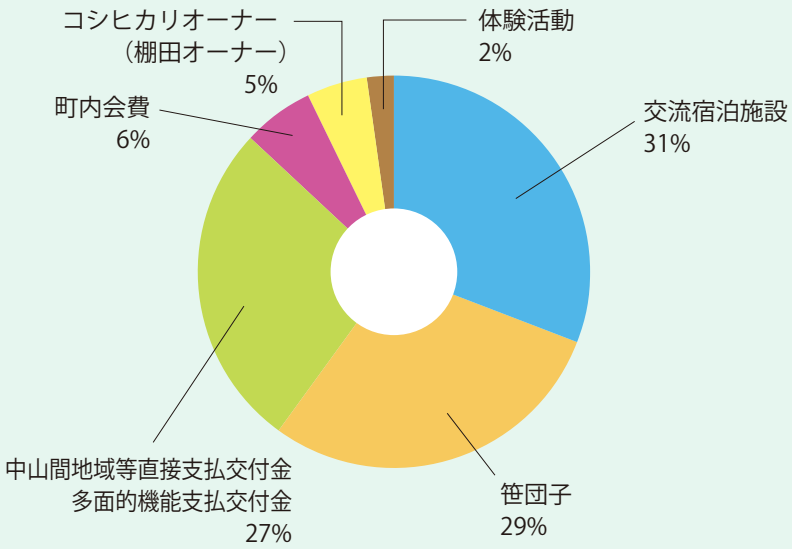

はさかけの様子

受賞歴
- 平成６年度豊かなむらづくりコンクール 農林水産大臣賞受賞
- 平成24年度「かあちゃんの家」JA農業賞受賞

基本情報

名称	安塚区細野の棚田
枚数	120枚
耕作面積	約10ha
耕作率	89.5%
標高範囲	150～400m
平均勾配	1/20
法面の構造	土羽（土坡）
水源	天水
保全団体	ほその村農地保全の会
棚田オーナー制度	平成6年から開始

活動資金



地域における取組のキーワード

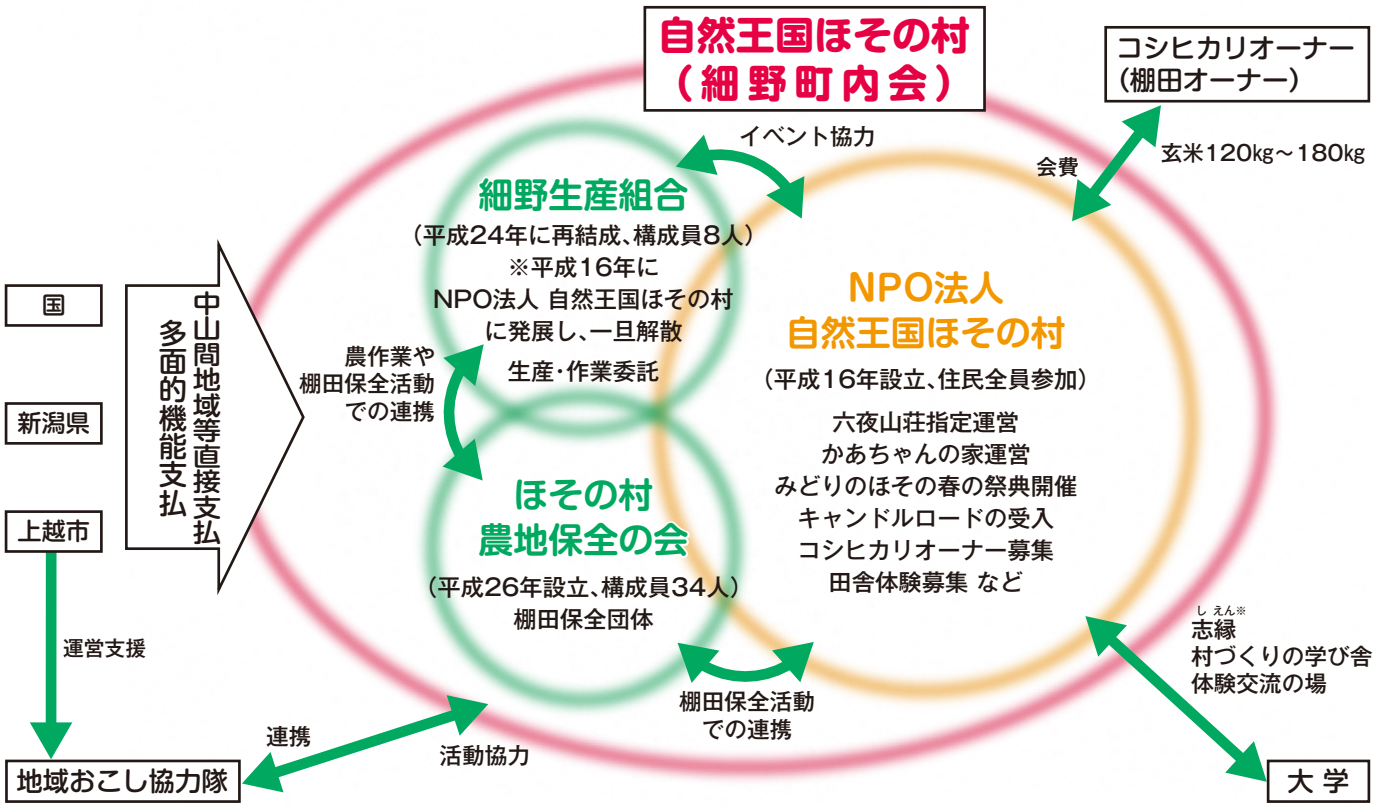
- 地域おこし協力隊
- 教育分野との連携
- 棚田オーナー制度
- 都市農村交流
- 農泊の推進
- 農産物の加工販売

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 298 133 659*30

地域振興活動をめぐる関係図



※志縁：志（こころざし）を持った繋がり

インタビュー

「自然王国ほその村」のみなさん

集落の過疎化・高齢化が進む中、どういう方向に細野集落は向かっていくのかを考える時期。

団結力と行動力で、細野集落を、一歩先をゆく集落にしてきた地元のみなさんから これからの細野集落についてお話を伺いました。



「NPO法人自然王国ほその村」代表理事を務める大日向 義一さん

過疎化・高齢化による人材不足は、細野集落だけに限ったことではありませんが、こうした深刻な状況だからこそ、細野集落がひとつになって、色々な話し合いをしながら、これからの進む方向性を考えています。新たな集落の歴史を、どう刻んでいくかを考える転換期ですね。

こうして新しいことを始める時、最初は反対意見があっても、どうしてもダメだというものではなく、みんなで意見をまとめて、協力し合える集落だから、方向性の決定や意思統一はやりやすいですね。

Q 細野集落の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 平成元年から現在も続く「みどりのほその春の祭典」ですね。夫婦での研修視察で色々な地域に出向き、多くのことを学んだ集落のみんなが、気持ちをひとつにして取り組んだ最初のイベントです。「みどりのほその春の祭典」の成功で感じることができた「何かできそうだ」という気持ちの変化や、集落内の団結力があったから細野生産組合を立ち上げ、「かあちゃんの家」や「六夜山荘」を運営することができました。これからも集落のみんなが温かい心配りで「みどりのほその春の祭典」に取り組み、心を癒しにお越しいただくみなさんを迎えていきます。



夫婦で参加した先進地視察研修会

Q 細野集落の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A 「自然王国ほその村」の取組に掲げている、「現状維持から未来志向へ」ということです。この細野集落で生きていくためにはみんなで知恵を出し合って工夫をし、行動していかなければと思っていました。早くから集落のみんなにその意識の変化があって、他地域より一足早く、色々と新しい取組をやってきました。地域活性化に向けた時代の流れの中で始めから行政と一緒に取り組んでいたこともあって、「かあちゃんの家」や「六夜山荘」は他地域の同じような立場の方からたくさんの視察依頼を受けました。自立することはすばらしいです。



大学ゼミ合宿時の講話（六夜山荘）

細野集落 取組のプロセス

取組以前

細野集落は集落形成が約700年前といわれ、里山の景色が広がる自然豊かな土地である。しかし、多い年では3mを超える雪が積もる豪雪地帯であり、人々は共に支え合い、助け合いながらこの山あいの集落の棚田で農作業を続けてきた。

昭和50年代初め、細野集落では人口・世帯数の減少、転出（挙家離村※）、若年層の減少、高齢化、担い手不足、農地の荒廃などが少しずつ深刻化し、集落内の連帯感が薄れていった。「このままでいいのだろうか」と危機感を抱いた人々は、元気な地域でいるためにどういう村づくりをする必要があるかを真剣に話し合った。

※挙家離村：一家総出で都市に引っ越すこと

取組のきっかけとその過程

昭和54年、新たな村づくりに向けて、集落全員で意見を出し合い、細野集落の未来を考える「あじさいクラブ」を結成した。活動の一歩として先進地視察研修会を実施することになった。細野集落が試みたのは、夫婦同伴での視察研修というスタイルだった。夫婦が一緒になって視察活動や講演会に参加することで「自分たちの地域をより良くするためにみんなで何をやったらいいのだろう」という意識改革に目覚めていった。こうして視察を重ねていった結果、自分たちでも「何かできそうだ」という気持ちが芽生えた。


「みどりのほその春の祭典」

夫婦での視察で学んだことを活かし、平成元年に「自然王国ほその村」を設立し、最初の取組として「みどりのほその春の祭典」交流イベントを開催した。多くの人で賑わう会場で、細野集落の人々は観光ガイドや手作りの笹団子、おこわを販売し、「やればできる」という大きな自信がついた。

キーポイント 細野生産組合を設立し、事業展開がはじまる

第1回「みどりのほその春の祭典」の開催で収益をあげることができ、このイベントは翌年以降も継続していった。毎回、イベント内で販売する山菜や笹団子が飛ぶように売れ、細野集落の人々との交流の中で受ける温かい心配りは来訪者から高く評価された。


六夜山荘

イベントを継続しながら少しづつ活動を拡大し、平成6年に「細野生産組合」を設立し、笹団子、おこわの加工施設「かあちゃんの家」を開き、平成8年には体験交流施設「六夜山荘」の運営を開始した。細野集落の人々が施設を管理、運営することで集落内での生産、加工、体験、消費の一貫体制を作り、所得と雇用を確保して集落の「自立」を進めた。


「かあちゃんの家」の笹団子

また、他地域の人を受け入れる拠点ができたことで、田舎体験やコシヒカリオーナー（棚田オーナー）など、多くの人たちが細野集落に足を運んでくれるようになった。

「自然王国ほその村」の活動は、地域活性化に向けた時代の流れの中で、行政と一緒に早くから取り組んでいたこともあり、平成6年に豊かなむらづくりコンクールで農林水産大臣賞を受賞した。以前は、他地域への視察を積極的に行なっていた細野集落が、他地域からお手本とされるようになっていった。

現在

第1回「みどりのほその春の祭典」が成功した収益を集落内でどうするか話し合った際、「来年に取っておくべきだ」という人々の意見があった。その根底には、集落民総参加で新しい村づくりを進めていきたいとの思いがあり、その思いを実現し発展した取組を後世に繋げるために平成16年に「NPO法人 自然王国ほその村」を設立した。


「協力隊員実習田」の稲刈りの様子

法人化から15年以上経ち、細野集落は再び高齢化による人材不足で大きな転換期に差し掛かっている。どうやって現在の集落機能を維持していくかが大きな課題となっており、棚田の維持・生産管理の他、施設などの運営管理の見直しに取り組んでいる。また、行政と連携して令和2年の地域おこし協力隊の受け入れや、大学、コシヒカリオーナー参加者からの「志縁」を受けて活動していくためにホームページによる情報発信をしている。さらには細野集落出身の人に行事などに参加してもらい、集落の魅力を再確認してもらう「地縁」による繋がりのための環境を整備したいと考えている。

現在、集落内には60歳の定年を機に移住された人がおり、貴重な担い手となっている。細野集落を共に守ってくれるということは明るい出来事であり、細野集落のことを思う人が一人でも多く増えていくように活動を継続している。

プロセス1 昭和54年

「あじさいクラブ」を結成

新たな村づくりに向けて、集落全員で意見を出し合い、細野集落の未来を考えるグループができた。

プロセス2 平成元年

「自然王国ほその村」を設立し「みどりのほその春の祭典」を開催

集落総出で心のこもった手作りの交流（山菜採りツアー）は見事成功し、自分たちも「やればできる」という自信に繋がった。この交流で提供した笹団子や山菜弁当のおいしさ、温かい心配りなどが評価され、長く続く細野集落のイベントになっている。



「みどりのほその春の祭典」

プロセス3 平成6年

「細野生産組合」を設立

集落内の所得と雇用の創出と、地域経営を進めていくための基盤となった。

プロセス4 平成6年

「かあちゃんの家」を開き、笹団子などの製造販売をした

イベントで大好評な笹団子やおこわを、本格的に製造販売することにした。



「かあちゃんの家」作業風景

PICKUP! 平成6年 豊かなむらづくりコンクールで農林水産大臣賞を受賞

細野集落は、地域活性化に向けた時代の流れの中で行政と一緒に早くから取り組んでいたこともあり、他地域からその取組を参考にされるようになった。

PICKUP! 平成8年 コシヒカリオーナー（棚田オーナー）の制度の開始

都会の人向けに開催されていた交流体験に細野集落の米を用意してたことがきっかけとなり、都市との交流活動としてコシヒカリオーナーの受入を開始した。

プロセス5 平成8年

交流体験施設「六夜山荘」の運営を開始

「細野で泊まってみたい。手作り料理が食べたい。」という外部からの要望もあり、体験交流施設「六夜山荘」の運営を開始した。



六夜山荘の看板

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

プロセス6 平成16年

「NPO法人 自然王国ほその村」を設立

細野生産組合を発展させ「NPO法人 自然王国ほその村」を設立。大学と年間を通じた交流がスタート。



「自然王国ほその村」鳥瞰図

平成26年：多面的機能支払取組開始

プロセス7 令和2年

地域おこし協力隊を受け入れる

地域おこし協力隊や、新たな移住者が増えるように細野集落の魅力ある情報を発信していく。

細野集落の今後の展望は

集落内での体制見直しの取組は細野集落としての最重要課題ではあるが、それ以上に細野集落を含む上越市安塚区を取り巻く過疎化・高齢化の状況はとても厳しく、集落単独で解決できる問題でないのが現状である。この農業や地域活性化の問題を安塚区内での集落を超えた広域的な枠組みで解決していく新組織を立ち上げるため、「自然王国ほその村」は行政と共に近隣集落と連携しながら計画を進めている。

取組によって起こった変化

「みどりのほその春の祭典」
来場者数　300人（令和元年）

交流体験施設「六夜山荘」
利用者数　650人（令和元年）

糸魚川市根知地区

中山間地域等直接支払 根知集落協定

稲場・栗山・山口・山寺・上町屋・上野・大工屋敷・大神堂・東中・別所・和泉棚田

地域の概要

根知地区は、糸魚川市南部の長野県境近くに位置し、姫川支流の根知川沿い15集落で形成される地区である。地区を見降ろすように存在する「日本百名山 雨飾山」と「駒ヶ岳」から、棚田へ良質な米を作るための水が供給されている。

未整備の水田の作業効率の悪さと過疎化・高齢化の問題に対して、行政と共同で向き合いながら、中山間地域等直接支払制度（第1期～第3期）の「上根知集落協定（上根知6集落）」において、根知地区の田んぼを守ってきた。

平成17年に「（株）小田島建設」、平成24年には「（株）根知ライスファーム」が農業参入して過疎化・高齢化で農業を辞める農家に代わり、根知地区の多くの田んぼの担い手となった。２つの法人は、耕作放棄地を出さないよう、更なる農作業の効率化のために先頭となって地区全体で「根知集落協定」を引っ張り、根知地区の農地の保全に取り組んでいる。



山寺棚田（5月）


ほ場整備後の山寺棚田（平成24年）

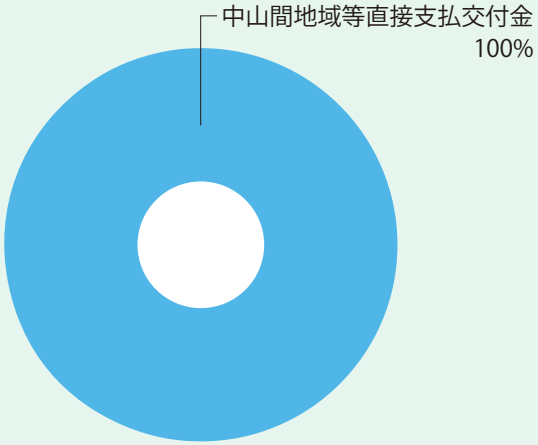

上町屋棚田の稲刈り

受賞歴
・平成29年度農業農村整備優良地区コンクール
中山間地域等振興部門 全国水土里ネット会長賞受賞

基本情報

名称	稲場・栗山・山口・山寺・上町屋・上野・大工屋敷・大神堂・東中・別所・和泉棚田
枚数	578枚
耕作面積	約58.48ha
耕作率	100%
標高範囲	90～400m
平均勾配	1/20
法面の構造	土羽（土坡）
水源	根知川
保全団体	根知集落協定

活動資金



地域における取組のキーワード

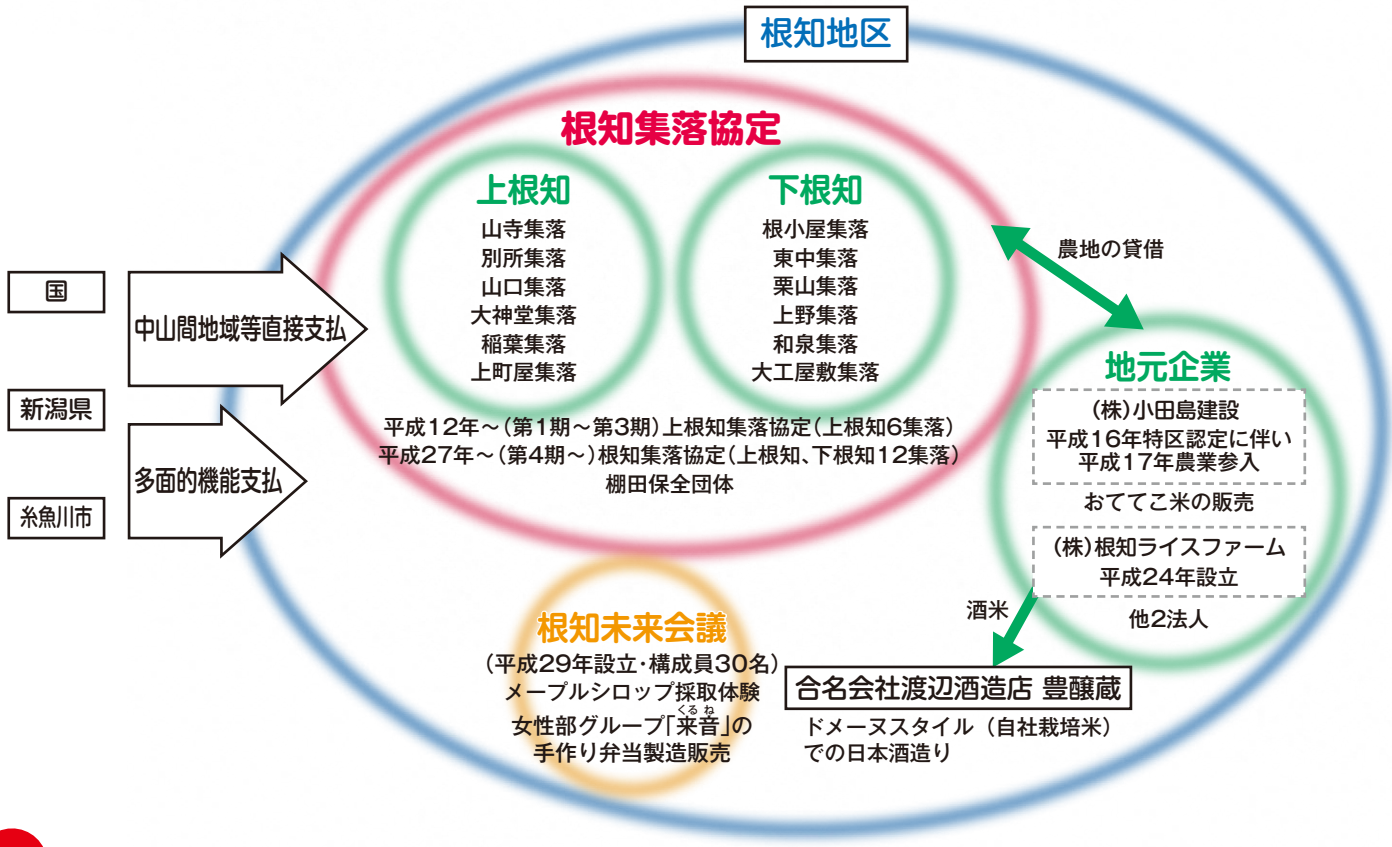
- 企業等との連携
- 都市農村交流
- 農産物のブランド化
- 農産物の加工販売
- ほ場整備

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 314 049 597*30

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

渡辺(わたなべ) 吉樹(よしき)さん

次の世代が安心して受け取れるように 12集落全体で根知のほ場を守っていきます。

12集落からなる「根知集落協定」として、現在この根知地区にどのような課題があるかを「(株)根知ライスファーム」・「合名会社 渡辺酒造店」の渡辺さんにお聞きしました。



根知谷で酒造業を営む合名会社渡辺酒造店の渡辺 吉樹さん

現在の米余りの状況で、農業を辞める人が増えていき、管理されない田んぼが一度できてしまうとなかなか元に戻りません。どこを守り、どこを切り替えていくのか、農地を保全して担い手も守っていかないと、特に中山間地域の農業については完全に崩壊してしまいます。

そんな危機はもう5年切ったくらい先にあります。その時になって困らないように根知地区全体として一つになって農地を守っていかなければこの土地で農業を続けていけません。農業を維持するために、補助金等をどう各集落の農地に活用していくかが課題ですね。

Q 根知地区の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか

A 常に継続して考えていることは、ほ場整備のことですね。この土地で営農を維持していくため、次の世代が安心して受け取れるためには、止めてはならない重要な取組です。厳しい急傾斜の上根知6集落から始まって、今は12集落全体で取組を続けていかないと、根知地区の各集落は存続できません。もちろん行政のサポートも必要です。みんなで協力して守っていこうという気持ちのもとに取組を行うことが大事なんですよ。
昭和50年代のほ場整備も、根知地区全体で取り組んだから、その思いはずっと同じで今も持続しています。


稲刈りの様子

Q 根知地区の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A 根知地区は、もともと外部の力が入っていないところで、とても結束力が強いんです。これは根知地区にとって大事なことなのですが、今後は我々も変わっていかなければならない時期にさしかかっていると思います。外部からの人を積極的に受け入れるためには、もっと情報発信力を付けなければなりません。そのためにもまずはきちっと生産して、販売することの両方を機能させ、私たちがこの地区を守っていく体制を他から見ても魅力的に見えるよう取組を進めています。若い人たちが、「入ってきてもいいな」と思えるような魅力ある地区にしていくことが大事だと思っています。

根知地区 取組のプロセス

取組以前

根知地区の人々は、先祖から受け継いだ田んぼでの稲作を昔から家業としていた。根知地区は田んぼの水の便が悪く、ポンプで水を揚げたり、ため池を作ったりと苦労をしながら農業に取り組んでいた。昭和50年代にほ場整備が行われて水の問題は改善されたものの、他の中山間地域と同様に、過疎化・高齢化が少しずつ深刻な問題となっていた。


棚田に至る急傾斜の山道

取組のきっかけとその過程

上根知地区の山寺、別所集落は、昭和50年代のほ場整備には含まれていなかったため、早急な対策が必要だった。上根知地区にはリーダーとして集落を牽引できる人が各集落におり、各々が「このままでは農業を続けていけない」という思いから、根知地区の農業を次の若い人たちに続けてもらうためのほ場整備の必要性を感じていた。そこで平成12年から始まった中山間地域等直接支払制度を利用してほ場整備をするための合意形成を集落間で図った。各集落の力を合わせて上根知地区全体を守っていきたいという思いが形となり、上根知の山寺、別所、山口、大神堂、稲葉、上町屋の6集落で中山間地域等直接支払「上根知集落協定」を締結した。


畦畔の草刈り

平成23年から平成29年にかけて、山寺、別所集落のほ場整備を始めとして4集落の暗渠排水の整備が行われた。

キーポイント 地元企業が農業参入


小田島建設

過疎化・高齢化が深刻になっていく中、平成16年に糸魚川市が農業特区の認定を受けたことがきっかけで「(株)小田島建設」が農業に参入した。農地や農作業を受託する体制と、乾燥から精米までの加工体制を確立し、山間地の耕作放棄地や稲作に不向きな農地についてはブルーベリー、ナス、そばを栽培して販売活動を展開。また、糸魚川市が中心となり組織された「根知地区振興計画作成委員会」が策定した振興計画「プロジェクトZ」に基づき、根知地区は担い手のいない農地を積極的に紹介する農地利用調整組織「田吾作」をつくり、耕作放棄地の拡大防止のために農地、農作業を受託する体制を支えた。

平成24年には「(株)根知ライスファーム」が農業参入し、「(株)小田島建設」を含む、4つの農業法人が根知地区の農業を牽引している。これも「上根知集落協定」の第3期までのほ場整備で、みんなできちんと農地の保全をしながら、安心して農地を受け取ってもらえる体制を作ってきた成果である。

中山間地域等直接支払制度が第4期となる平成27年に、根知地区の中で緩傾斜地の下根知地区の根小屋、東中、栗山、上野、和泉、大工屋敷の6集落が加わり、根知地区12集落の「根知集落協定」を締結した。昭和50年代のほ場整備で作られたパイプラインの老朽化対策として、今後は根知全体で改修工事を行なっていく予定である。

現在

過疎化・高齢化の流れは止められず、人数が減ってきていても農地を保全できるやり方に変えていかなければならないという大事な時期に差し掛かってきている。農業法人が根知地区の農業を牽引しているものの、離農者が増加する中、更に効率を上げていかなければ農地は維持できない。


山寺集落のみなさん

若い人がもっと地域に入ってくることのできる環境と、それを受け入れることのできる基盤を作るために、農業に絶対的に掛かる手間を低減し、用水や農道の管理方法のルールを変えていき、ルール決めだけで対応できないハードの問題は改修で解決をしていく。今後は根知地区の取組目標として盛り込んで、計画的に進めていくことが地区の維持、地域活性化に繋がることとして考えている。

また、「合名会社渡辺酒造店」が平成30年に開いた「豊醸蔵」は、「ここの米で、ここの水で、ここの人が作る」酒造りと、「根知」という場所からその土地の魅力をお酒に込めて販売することをコンセプトとして、「根知谷」と称され、箱庭のようにぎゅっと詰まった根知地区の存在と魅力を発信している。根知地区の人々が、家族の様に結束して地区内の将来について考え、美しい景観、水、米や酒などの魅力をより多くの人に知ってもらい、外部の人と直接繋がっていけるようにと、一丸となって計画的に取組を進めている。


豊醸蔵の自社栽培米製品

プロセス1 昭和50年代

根知地区でほ場整備を実施

農地を3反（30a）で集約していたことで、中山間地域でありながら機械が入れる田んぼになった。

プロセス2 平成12年

6集落で「上根知集落協定」を締結

急傾斜地の上根知6集落による集落協定。（平成12年開始の第1期から第3期までの15年間）

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

プロセス3 平成17年

「（株）小田島建設」が農業に参入

平成16年に糸魚川市が農業特区の認定を受けたことで地元建設会社が農業参入。農地や農作業を受託する体制の構築と、農業施設の整備により、乾燥から精米までを自社で行うことにした。



小田島建設のおててこ米

すずまき（種まき）

プロセス4 平成17年

ブルーベリー、ナス、そばの栽培を開始

県からの指導もあり、山間地の耕作放棄地や稲作に不向きな土地に栽培して販売活動を展開。


越の丸茄子


ブルーベリージャム


そば畑

PICKUP! 平成17年 根知地区振興計画「プロジェクトZ」を策定

アルファベットの最後である「Z」がその先がないという意味を示し、これ以上集落を減らさないという計画。根知地区は、農地の利用調整に「田吾作」や根知体験交流プロジェクト「じろの会」を結成した。


「じろの会」でのメープルシロップ採取体験

PICKUP! 平成17年 女性グループが中心となった景観形成活動

根知地区の世代間を超えた「ひまわり」、「あじさい」、「芝桜」の植栽活動から景観形成や環境保全が図られた。


景観形成活動

平成18年：農地・水・環境保全向上対策（モデル地区）取組開始

プロセス5 平成24年

「（株）根知ライスファーム」が農業に参入

「合名会社渡辺酒造店」によって設立された法人で、酒蔵「豊醸蔵」の前の田んぼでは、自社で仕込む酒米が作られている。


酒蔵の目の前に酒米の田んぼがある

プロセス6 平成27年～

12集落で「根知集落協定」を締結

根知集落協定6集落と下根知6集落で新たに締結。（平成27年の第4期～）

PICKUP! 平成29年「根知未来会議」を設立

「じろの会」から引き継いだメープルシロップ採取体験や、地元の女性部グループ「来音（くるね）」が作る弁当を販売や地元の老人会に配布する活動で根知地区の活性化に取り組んでいる。

根知地区の今後の展望は

根知地区は地形、水、気温の寒暖差から良質米が取れる条件が整っており、根知集落協定が牽引して地区全体で農業を次の世代にしっかりと繋ぐことが、美味しい米を作り続けていくこと、農業を続けていくことができる要素と考えて取組を進めている。また、根知地区という魅力が詰まった自分たちの土地の情報発信をして、地区のものを買ってくれる消費者と直接繋がっていくことも、ずっとこの土地で生活を続けていくために必要なこととして考え、取組を進めている。

取組によって起こった変化

担い手の集積
約300軒の農家 → 中心経営体27軒（現在）

「豊醸蔵」の年間来場者数
約7,000人（令和元年）

佐渡市岩首

岩首談義所

岩首昇竜棚田

地域の概要

岩首集落は、佐渡市南東部の海沿いに位置し、集落背後に広がる「岩首昇竜棚田」は、60m～470mの傾斜地に点在し、江戸時代頃の開田から現在に至るまで、400年近くその形状を維持している。「岩首昇竜棚田」の呼び名は、落葉広葉樹の里山を開墾してできた棚田の形状を龍が空に昇っていく様子に例えたのが由来で、棚田のキャッチフレーズになっている。

過疎化・高齢化の進行に加えて、急傾斜地で不整形な田が多いことから機械作業も難しく、高い土手の草刈りが重労働であった。農業を営む岩首集落の人々は、担い手不足と農作業の大変さを乗り越えて生活をしてきた。

佐渡ジアス（GIAHS：世界農業遺産※）に登録されたことで、歴史ある棚田の維持・保全のため、岩首集落の人々は様々な交流事業や観光事業などを通じて生まれた人と人との「縁」を大切にしながら地域活性化を目指している。

※（GIAHS：世界農業遺産）：世界的に重要かつ伝統的な農林水産業を営む地域を、国際連合食糧農業機関が認定する制度



田植えを終えた岩首昇竜棚田（5月）


岩首昇竜棚田から見る新潟市の夜景

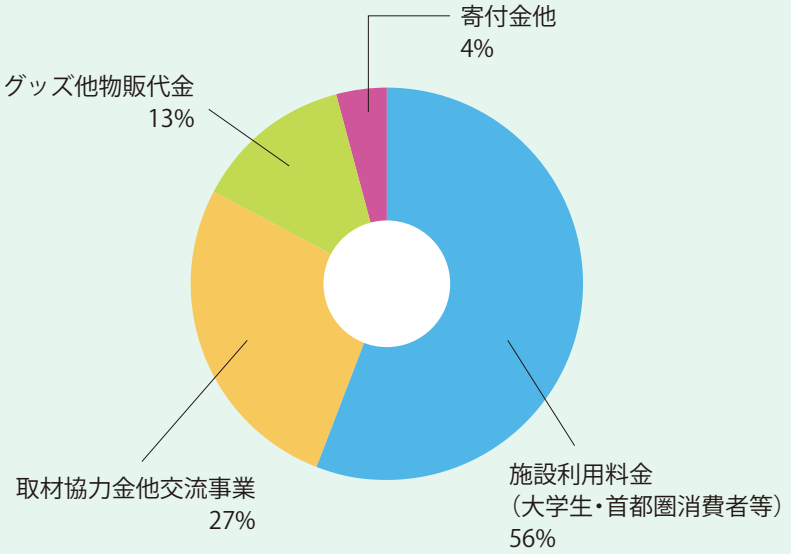

ヤブカンゾウ（7月下旬）

受賞歴
・クールジャパン・マッチングアワード2019 特別賞
※岩首昇竜棚田での農業体験などの取組が評価されたアウトドアブランドの（株）スノーピークが受賞。

基本情報

名称	岩首昇竜棚田
枚数	234枚
耕作面積	約11.6ha
耕作率	約40%
標高範囲	60～470m
平均勾配	1/8.7
法面の構造	土羽（土坡）
水源	湧水・天水
農家支援	岩首村づくり委員会（中山間管理） 岩首農用機械利用組合（農作業受託・育苗）

活動資金



地域における取組のキーワード

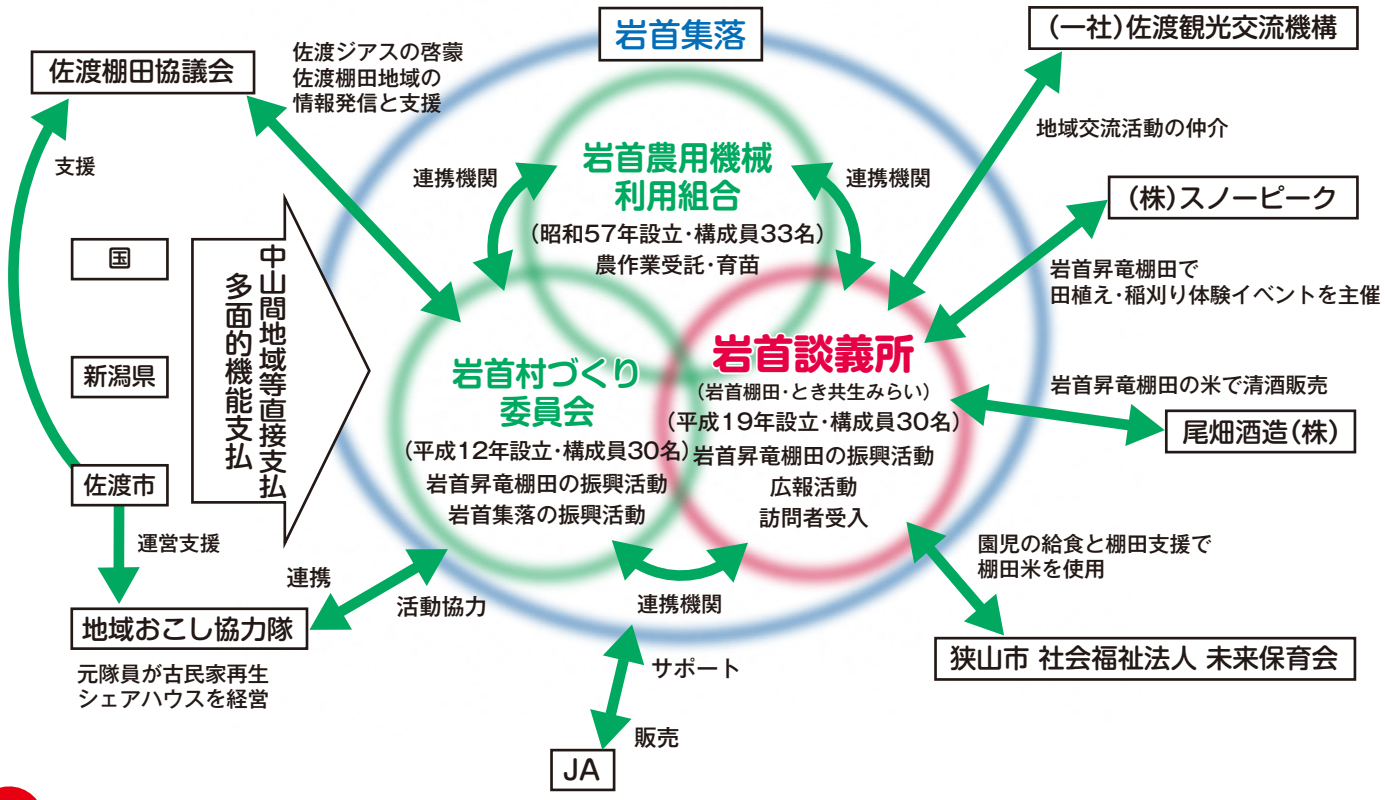
- 地域おこし協力隊
- 企業等との連携
- 教育分野との連携
- 都市農村交流
- 農産物のブランド化
- 農産物の加工販売
- 閉校、古民家等の利活用

アクセスはこちらから

<MAP>

MAPCODE® 278 388 686*36

地域振興活動をめぐる関係図



インタビュー

大石 惣一郎(おおいし そういちろう)さん



岩首昇竜棚田の魅力を語る大石 惣一郎さん

人と人が「縁」で繋がっていくことが、岩首昇竜棚田の将来にとって欠かせないチカラだと考えています。

様々な交流事業や観光事業を独自の人間力で展開する、佐渡棚田協議会の会長でもある大石さんから岩首集落についてお話を伺いました。

岩首昇竜棚田で様々な交流を行うことを農業の本筋ではないという人もいるけど、こういうスタイルの棚田や集落の維持を推進する過程で繋がる新たな人の「縁」があることは、これからの岩首集落の財産だと考えていますよ。岩首昇竜棚田と岩首集落の将来的な生き残り方って、環境と景観、そして人を好きになってくれて岩首集落を盛り上げてくれるコアなファンをどうやって作っていけるかにかかっていると思いますし、そのためには人を繋いでくれるSNSを積極的に使って岩首昇竜棚田の魅力を発信することも、大事な地域活性化の活動なんだよね。

Q 岩首集落の地域活性化に向かって持続させたことは何ですか



A 持続しているというか、大切にしていることは人と人との「縁」ですね。「縁」が繋がることで岩首集落に人が集まる。そういう人たちがまた新しい「縁」を繋いでくれる。それがプラスになるということがやっと浸透してきた感じだね。棚田に人がくることを敬遠していた人が、ウチの棚田がテレビに出たよ、ポスターになったよと喜び、人が来ることが悪いことではないと思えるようになったことが嬉しいんですよ。こういう「縁」を繋ぐことは私ではなく、若い世代がリーダーシップを持ってやってくれるともっと嬉しいよね。

Q 岩首集落の地域活性化に向かって変化したことは何ですか

A スノーピークとの出会いは大きいですよ。スノーピークが主催した体験イベント「LOCAL WEAR TOURISM in SADO」は岩首昇竜棚田の価値を見出してくれましたしね。僕も岩首昇竜棚田の価値を高めるための努力をしましたよ。より多くの人に知ってもらうことであれば、僕は何でもやるって勢いでモデルもやりましたし。誰かがやらなければ、せっかく知ってもらう機会を逃してしまう。こうした活動は岩首昇竜棚田の価値を高めてお米の新たな販路を作り出し、岩首昇竜棚田のブランド米として認知度を上げてくれました。今ではスノーピーク関連の活動を一緒に応援してくれている農家も増えてきましたね。

岩首集落 取組のプロセス

取組以前

昭和50年頃、佐渡棚田協議会会長の大石惣一郎氏は、家業の農業を継ぐために岩首集落にUターンした。江戸時代に開墾された棚田は不整形な田が多く、機械での作業が困難であった。過疎化・高齢化が進み、後継者がいない岩首棚田で景観や環境の価値を高める取組を模索しても集落の人々に納得してもらえず、取組のための合意形成は困難であった。

昭和57年に、棚田はそれまでの田越し灌漑から田んぼ一枚づつに水が入るように整備され、小さなコンバインが入る農道も整備された。

しかし、将来、岩首集落で農業だけでは生活ができないという思いから農家の中には「耕作ができなかったら辞めればいい」という人もいた。「棚田での農業が主となる生活を次の世代に繋ぐのは無理だ。何とか生活できるようにしていかないければダメだ」という思いを大石惣一郎氏は常に抱いていた。



400年前の姿を残す棚田の様子

取組のきっかけとその過程

平成11年、早稲田大学名誉教授(元棚田学会会長)中島峰広氏が岩首集落を訪れた際、「この棚田の価値・景観は世界に誇れるものなのに、何故、耕作放棄地が増えているのか。棚田は日本古来のもの。そこで暮らしていた人たちの思いや歴史を感じたら、この環境は守らないといけない。」と言われ、「この棚田を自分の時代で絶やしてはいけない」と決意した。また、平成19年に環境省の「トキと社会」研究チームで佐渡に訪れた東京工業大学名誉教授桑子敏雄氏からは、トキは佐渡の地域活性化、地域振興のための大きなきっかけで、佐渡全体で取り組むことの必要性を学んだ。この両教授との出会いが岩首昇竜棚田での地域活性化を進める取組の分岐点になった。



岩首談義所は情報発信基地

閉校となった岩首小学校を「岩首談義所」として立ち上げ、情報発信と人と人の出会いを繋げる場として取組を始めたが、当初は「棚田に観光客なんか来ない、廃校舎に若者を集めるなんて無理」と反対意見もあった。しかし、地道に情報発信を継続したことで、次第に他地域との交流の拠点として多くの学生が岩首談義所に集まり始め、情報発信基地としての役割が定着していった。



佐渡棚田協議会の総会

平成23年に佐渡がジアス(GIAHS:世界農業遺産)に登録されたことで、中山間地域の棚田などの景観や伝統文化、農法が世界に知られることになった。様々な交流事業や観光事業を通してこの大きな財産を次世代へ継承するため、平成24年に佐渡棚田協議会が設立された。

キーポイント 棚田で(株)スノーピーク主催のイベントが開催された

平成29年、三条市にある総合アウトドアブランド「(株)スノーピーク」の「LOCAL WEAR by Snow Peak」プロジェクト開始にあたり、(一社)佐渡観光交流機構と連携して岩首昇竜棚田での「LOCAL WEAR」広告撮影と岩首集落の人によるモデル撮影に協力したことでスノーピークとの繋がりが生まれた。それがきっかけとなり、スノーピーク主催の「LOCAL WEAR TOURISM in SADO」による田植え・稲刈り体験イベントが岩首昇竜棚田で開催されることになった。ブランド力と発信力のあるスノーピークのイベントが開かれたことで、多くのアウトドアファンが訪れ、それが岩首昇竜棚田の知名度アップに繋がった。さらに、この活動が「縁」で、東京・大阪・愛知で展開するレストラン「Snow Peak Eat」で使用する米として岩首昇竜棚田米の使用契約が実現した。これらを通じて、棚田を観光振興の場として活用することは、これからの岩首集落の存続にとって必要なことだと感じた。

その他にも、平成20年から継続して園児の給食に棚田米を使用してもらっている狭山市の未来保育会や、佐渡島内の蔵元である尾畑酒造(株)と清酒「龍のめぐみ」での連携で岩首集落は新たな「縁」を築いていった。

現在

令和2年、県内出身の大正大学地域創生学部の学生が「地域実習」で佐渡を訪れ、岩首集落での生活体験を卒業論文に書いた。将来的に組織を立ち上げて岩首集落を盛り上げたいという思いから、令和3年からの地域おこし協力隊に志望を予定している。活動後は岩首集落で身の丈に合った組織を作り、生活基盤を作った上で自分の思いを継いでもらえるような人材に育てたいと考えている。古いしきたりや常識が残る集落内では閉鎖的な洗礼を受けることもあるが、若者らしい勢いのある新しいアイデアを発揮してくれることは、岩首集落の将来にとって大切なことで、こういう人材に出てきてくれたことこそ「縁」であり、この「縁」で人が繋がり、新たな後継者となって岩首集落を繋いでいくことに期待が高まっている。

プロセス1 昭和57年
岩首棚田の水路・農道を整備

それまでの田越し灌漑から田んぼ一枚づつに水が入るようにして、小さなコンバインが入る農道が整備された。

プロセス2 平成11年
棚田研究の第一人者である中島峰広氏が岩首棚田を訪問

早稲田大学名誉教授中島峰広氏の言葉から、「この棚田を自分の時代で絶やしてはいけない」と岩首棚田を守ることを決意した。

平成12年：中山間地域等直接支払取組開始

PICKUP! 平成10年代中頃 「岩首昇竜棚田」の名称が定着した

岩首棚田を調査に訪れた学生が、落葉広葉樹の里山を開墾してできた棚田の形状を「龍が空に昇っていくように見える」と言ったことが由来で、棚田のキャッチフレーズになっている。

プロセス3 平成19年
「岩首談義所」を設立

「トキと社会」研究チームの会議で佐渡に訪れた東京工業大学名誉教授桑子敏雄氏から助言を受けるとともに、岩首昇竜棚田の振興活動の拠点となる「岩首談義所」の組織名を命名してもらう。



岩首談義所

プロセス4 平成20年～
社会福祉法人 未来保育会が園児の給食として棚田米を使用

春には保育士・栄養士が棚田での田植え体験のために訪れる。

PICKUP! 平成23年 GIAHS：世界農業遺産の登録を受ける

佐渡ジアス（GIAHS：世界農業遺産）として日本初の登録を受ける。岩首昇竜棚田を始めとする中山間地域の棚田などの景観や佐渡の伝統文化、農法が世界に認められた。

プロセス5 平成24年
「佐渡棚田協議会」が設立された

佐渡の棚田地域が気持ちを一つにしながら生産活動、棚田保全に努める。

PICKUP! 平成25年 初の地域おこし協力隊を受入

古民家再生シェアハウスを開所。協力隊1期生は地元の方と結婚して定住。




海抜約270m約付近に建てられた展望小屋。

プロセス6 平成25年
第22回全国棚田サミットが佐渡で開催

岩首昇竜棚田にも多くの視察団が訪れた。展望小屋はサミットに合わせて建てられた。

プロセス7 平成29年
（株）スノーピークの主催で「LOCAL WEAR TOURISM in SADO」を開催

（一社）佐渡観光交流機構と連携して、スノーピーク主催のイベントが実現。
春と秋に岩首昇竜棚田での田植え・稲刈り体験イベントを開催。

令和2年：多面的機能支払取組開始



スノーピークの体験イベントが開催された棚田

プロセス8 令和2年
尾畑酒造（株）と清酒「龍のめぐみ」で連携

岩首昇竜棚田の米を使用して、尾畑酒造（株）が清酒「龍のめぐみ」を製造、販売。

岩首集落の今後の展望は

岩首昇竜棚田の環境と景観を好きになってくれて、ここに住んで盛り上げていってくれるようなファンをどう作っていくか。一方で、岩首集落が好きでも生活できなければ意味がない。岩首昇竜棚田の新たな価値を付けていくことと、岩首集落で生活するために必要な雇用基盤を作ることが必要である。そのためにもSNSを使って積極的に対話と交流を継続し、その結果、岩首昇竜棚田を繋いでいく第2、第3の人が生まれることを願い、情報発信を続けていく。

取組によって起こった変化

団体との連携 —— 4団体（現在）

移住者数 —— 4名（現在）